

神原地区遺跡分布調査報告

(川子谷B1号古墳発掘)

1988年3月

島根県

加茂町教育教員会

序 文

このたびの遺跡分布調査を行った神原地区は、古くから集落が形成されていたものと推察され、数多くの土器等が出土していますが、特に昭和47年に発見された、景初3年銘の三角縁神獸鏡は、全国の斯界関係者の注目的となりました。

古代から発達した集落は、現代においても、地域の中核の場として発展し、中学校、総合運動公園等、本町の教育文化の中心地となっており、これに伴う生活環境基盤も逐年整備されております。

しかし、急激にすすむ生活環境の近代化とともに、住民の生活態様も更に変遷しつつあり、これに対応すべく、更に集落の環境整備が求められています。

鳥根県教育委員会では、このような地区的実状を認められ、国の補助事業として本調査を採択して頂きました。今後は、この調査が有効適切に活用され、調和のとれた加茂町として発展することを期待するとともに、文化財保護の重要性の認識を深めて頂ければ幸いと思います。

おわりに、本調査を担当して頂きました、杉原清一先生他関係諸氏と御指導並びに御協力を賜りました上田健夫、井上晃孝両先生、蓮岡法暉先生、島根県教育委員会に厚く感謝申し上げます。

昭和63年2月1日

加茂町教育委員会

教育長 太 田 潔

例　　言

1. 本書は加茂町教育委員会が、昭和62年度国庫補助を受けて実施した神原地区遺跡分布調査と、その関連で行なった地内川子谷B1号古墳の緊急発掘調査の報告である。

1. 調査の体制は次のようにある。

調査主体者	加茂町教育委員会
	太田　潔　　(教育長)
調査指導者	ト部吉博　　(島根県教育庁文化課文化財保護主事)
	蓮岡法暉　　(八雲村立八雲中学校教頭)
調査担当者	杉原清一　　(島根県文化財保護指導委員)
調査補助員	藤原友子
事務局	山本　泰　　(加茂町教育委員会教育次長)
	杉原頼道　　(　　　　社教指導員)

1. 調査成果は分布図及び一覧表とするほか、個別に調査カード各2通を作製し、加茂町教育委員会と県教育庁文化課に保管し活用するものとする。なお新しく発見した遺跡の番号は島根県遺跡地図(1987年)記載の続き番号を付した。

1. 本書及び調査に使用した地図は主として加茂町開発課所管に関わる5千分の1地形図である。

1. 収録した遺跡のうちには既に消滅したものも含む。古墓についてはその石塔に着目したため若干の位置の移動はあり得る。また分布調査は踏査による地表の表微観察によるもので、埋蔵文化財のすべてを網羅しているとは言えない。従って図上の空白地に該当がないとは言い難い。

1. 第Ⅱ編として大字神原字川子谷に所在し、昭和60年に偶然発見された川子谷B1号古墳について緊急発掘調査の成果を収録した。

1. 発掘調査に關し遺物の鑑定・分析・調査等につき特に次の方々から格別の協力を得た。記して謝意を表します。

出土人骨鑑定	井上晃孝　　鳥取大学医学部法医学教室
朱顔料分析	上田健夫　　古代学協会会員
調査及資料提供	三宅博士　　八雲立つ風土記の丘資料館学芸主事

1. 本書の編集執筆は調査者において行なった。

1. 分布調査・発掘調査の全般にわたり地元の人々の協力を得た。記して謝意を表します。

中林明正　渡部広秋　神原地内各自治会　加茂小学校

目 次

序 文

教育長 太田 錠

例 言

Iはじめ	杉原顕道	1
II 神原地区遺跡分布調査		杉原清一
遺跡分布図		3
遺跡一覧表		6
遺跡の概要		8
遺構・遺物図		12
III 川子谷古墳群B1号墳緊急発掘調査報告		杉原清一
1.位置と環境		16
2.調査に至る経緯と経過		16
3.調査の概要		18
墳丘について　埋葬施設について　埋葬状況		
埋葬方法と時期について		
4.まとめ		23
付編		
I 川子谷B1号墳出土人骨について	井上晃孝	26
II 島根県加茂町川子谷B1号墳出土の朱色顔料	上田健夫	36

I はじめに

加茂町は、昭和9年に当時の加茂・神原・屋裏の三ヶ町村が合併して誕生した町で、東西6.4km、南北6.8kmのほぼ四角形の地形で、南北に陰陽を結ぶ国道54号線が走り、東西に流れる赤川と町の中央で交叉している。今回、昭和62年度国庫補助事業として分布調査した神原地区は、その大半が赤川南岸沿いに位置した国道以西の地域で、全町面積の約半分に相当する約3km²の範囲である。

神原の歴史を繰くと、天平五年に編まれた『出雲國風上記』に、古老の伝えに曰くとして「所造天下大神の神御財積み置き給ひし處なれば、則ち神財郷（カムタカラノサト）と謂ふべきを、今の人猶誤りて神原郷と云ふのみ。」と記されている。このことを裏付けるかのように昭和47年、度重なる赤川の氾濫による水害克服のためにすすめられた河川改修工事に伴い、神原神社が移転され本殿床下にあたるところから南北35m、東西約30mの前期古墳が発見され、その石室内部から夥しい副葬品と共に、『景初三年銘三角縁神獸鏡』が出土して脚光を浴びた。

このほか、湖州鏡出土の神原経塚・土器廻・菅代・川子谷古墳群等、これまでに確認されているものだけでも、約10ヶ所に及ぶ周知の遺跡が点在し、遠い古代から拓かれたところとして先人たちの営みが続けられて来たことを物語っている。更に、昭和54年には、住民の熱い要望に応えて総合運動公園が造成されたが、公園用地にあたる神原正面南・北丘陵稜線上から、弥生中・後期より古墳時代にかけての各種の埋葬遺構や土器などが発見されて論議を呼んだ。今日この地が、中学校・海洋センターなどを中心に町の教育・文化の中心地として発展してきており、今後もその総合的主要拠点として位置付けられているところから、結局これらの発掘調査は記録保存ということに落着いた。

このように、この一帯が今後も町民の期待を担ってさまざまな面で発展する限り開発の可能性も増大するものと考えられることから、文化財愛護・保存の立場に立って、昭和62年度国庫及び県の補助を受け神原地区の遺跡分布調査を実施するに至った。

なお、この分布調査地内には、たまたま所有者が山林境界設定の杭打ち作業を行い、その際古墳石室の石蓋を開いてしまったために発見し、昭和60年11月12日付で文化庁長官宛に届出をした「川子谷B1号墳（川子谷古墳群内）の方墳一基」があり、発見時に応急処置を施しておいていたが、今回この箇所については発掘調査と埋葬されていた人骨2体についての鑑定等も併せて実施した。

また、大茶臼山城など地内に点在する中世の城郭遺跡などの関連から、神原地区外ではあるが、ここと対峙する形で位置し、しかもこの一帯の中心的な城郭であった高麻山城の



遺構についても一部踏査を行ったが、この山が岡町大東町にまたいでいるため、その方面的調査を待たなければ最終的な結論や見解は得られないであろう。

以上、神原地区遺跡分布調査実施にあたっての、この地区の歴史的概要や調査に至る経緯をたどってみた。

調査は昭和62年8月7日から開始し、9月9日までを行い、その後随時補充調査を行った。川子谷B1号墳の発掘は、埋葬入骨の鑑定を依頼した井上晃孝先生と日程調整し、8月24日に主体部調査を行うよう作業を渉めた。調査後この古墳主体部は埋め戻して保存することとした。

この期間は山野は特に茂り、踏査も観察も困難を極めたが、県文化課卜部主事、調査指導蓮岡先生ともども地元の人の案内も得て、地域内をくまなく無事踏査し終えた。



II 神原地区遺跡分布調査



加茂町神原地区遺跡一覧表

遺跡番号	名 称	種 別	所 在 地	現 状	概 要	文 献
24 - 1	神原正面遺跡 正面北遺跡	古墳群	字正面	公園	A・C・E区方墳16基 最大は5号 培木棺直葬 C10-1号は箱式石棺 C12号生台状墓 B区溝状遺構 出土器 中央公園造成で消滅	3、
- 2	正面南古墳群	古墳群		*	1~4号方墳木棺直葬 土師須恵 中央公園造成で消滅	
				山林	5~8号方墳 未掘	
3	神原神社古墳	古 墳	字松井原	河岸	方墳? 近35m位 楕円式石室に割竹 形木棺 景初二年銘鏡 棺 銀鏡 鏡 爪鉤 土師器多数 消滅移築	3、2、6、 7、8、12、 13、14、15、 16
19	宿米塚古墳	古 墳		雜	円墳? 18×12m 顶部に五輪塔片集 積	3、2、5
6	川子谷古墳群	古墳群	字川子谷	山林	A群 1・2号方墳? 箱式石棺消滅 3号7×7m未掘 B群 1・4号方墳 2・3号円墳 1号発掘調査 箱式石棺 男女重葬 顔面朱 副葬品なし	3、2
20	草枕古墳	古 墳	字草枕	山林	小型異形椭円式石室残存 壇丘破損	3
46	下神原西岡古墳群	古墳群	神原字西岡	山林	方墳2基 円墳? 1基 2号墳頂蓋石散乱	
4	音代横穴群	横穴群	字音代	堤防	須恵器 入骨 刀(粉失) 消滅	1、3、2
5	土器選横穴群	横穴群	字土器選	山・畠	須恵器 消滅	3、2
42	砂遺跡	散布地	字砂803	畠	土師器片 須恵器片	
50	松ノ木遺跡	散布地	字松ノ木	畠	かつて土器・砾石が出土した	
39	赤越遺跡	散布地	字赤越	畠・山	土師器 丹塗もあり 消滅	
13	後ノ堀絆塚	絆塚	字後ノ堀	山林	石積室 四耳壺 潤州鏡	2、8、10
43	出古墓	古 墓	字土牌	山林	五輪塔片集積	
40	桜古墓	古 墓	字桜	山林	五輪塔片20基くらい	
41	竹ノ内古墓	古 墓	字竹ノ内	墓地	五輪塔片2基?	
18	下神原五輪塔遺跡	古 墓	字京塚149 150	山林	発掘調査 五輪塔片集積 消滅	2、11
44	土居城跡	城 垣	字土居	山林	5~6郭と腰曲輪・大堀切	2
12	大茶臼山城跡	城 垣	字大茶臼	山林	簡易な小削平面 物見郭	2、5、9
36	神原正面城跡	城 垣	字正面	公園	3段の郭 堀切 出塙か	
38	高城城跡	城 垣	字高城	荒畠	馬場ありと伝う 完全消滅	

他 地 区 遺 踪 一 覧 表

造 跡 号	名 称	種 别	所 在 地	現 状	概 要	文 献
37	宇 治 寺 ノ 上	古 墓 部	大字宇治寺ノ上	山林	方墳 4基 週約10m位 未掘	
45	夕 日 谷 古 墓	古 墓	大字三代字夕日谷	山林	6×6mほどの円墳	
49	高 畑 古 墓	古 墓	大字三代字	墓地	方墳? 13×15m位 穴式石室 半分残存 石室内幅0.7深0.5m	
35	龟 山 石 横 塚	經 塚	大字宇治字	山林	川石敷布	
48	大 上 横 古 墓	古 墓	大字三代字岡ノ前	墓地	五輪塔集積 亂入宝鏡印塔 永禄年銘刻銅板納封あり	
47	岡 上 菩 城 菩	城 菩	大字三代字竹ノ下	山林	尾根上に断続する小郭8段と堅壁	
23	高 麻 城 跡	城 跡	大字大西字高麻	山林	(未調査部分あり) 小門谷跡も含む 城戸郭2か所等	9、5、3、 1、2

文 献

- 野津左馬之助：『大原町誌』 昭和11年
- 中林季高：『加茂町史考 本文編』 昭和31年
- 編集委員会：『加茂町誌』 昭和59年
- 加藤義成：『風土記参究』 昭和56年
- 雄山閣：『雲陽誌』複刻本 昭和46年
- 読光新聞松江支局：『古代品根の謎』 昭和56年
- 前島己基：『郷土考古学ノート』 昭和57年
- 山陰中央新報社：『島根県大百科事典』 昭和57年
- 新人物往来社：『日本城郭大系 14』 昭和55年
- 近藤 正：『島根県下の縄筒について 神原縄塚』『島根県文化財調査報告Ⅲ』 昭和42年
- 蓮岡法暉：『神原五輪塔』『埋蔵文化財調査報告』 昭和46年
- 蓮岡法暉：『神原神社境内古墳発掘調査概況』『季刊文化財 17』
- 蓮岡法暉：『神原神社古墳出土の景初二年陳は作重列式神祇鏡』『考古学雑誌 58-3』 1972年
- 前島己基・松本岩雄：『神原神社古墳出土の土器』『考古学雑誌 62-3』 1976年
- 前島己基：『神原神社古墳のもつ意義』『季刊文化財 20』
- 前島己基：『神原神社古墳をめぐる二三の問題』『山陰史談 6』 1973年

神原地区遺跡の概要

神原地区は斐伊川の支流赤川の下流域南側にあり、主として北に向かう丘陵を含む河岸地形のところである。地名語源について『出雲國風土記』は、「みやこのかたち神財」郷が誤って「神原」郷となったとしている。

本書に収録した遺跡は昭和48年に行なわれた分布調査の成果と、「加茂町史考本文編・資料編」を参考に限なく踏査を行なっての成果である。

これらの遺跡からみると縄文時代に遡ることは見当らず、すべて弥生時代以降であり、特に古墳時代において顕著である。

以下主な遺跡について概観する。

1. 神原正面遺跡について (No.24)

赤川南岸の丘陵上に位置し、神原中心集落を眼下にする広大な古墳群を主とする遺跡である。昭和57年遺跡のほとんどが中央公園造成によって発掘調査後消滅した。

正面北についてみるとE・A区とC区の北半分は方墳の並ぶ区域であり、C区南側の最頂部は円形に削り出した大きな台状地に40基以上の墓壙が密集し、主として弥生時代後期～末期の墓地であった。B区は堀割り状の地面に弥生時代後期の土器が落ち込んだ、性格不明の遺構であった。

正面南は棱線上に8基の方墳が認められたが、南側棱線上にはさらに小形の古墳かと思われるわずかな上盛り部分が9か所以上認められる。この正面南古墳群のうち4基は消滅した。古墳のほとんどは木棺直葬であり、C区10-1号墳のみが箱式石棺であった。E5号墳は木棺直葬の床面に朱が認められ、剣が副葬され、主体上面には供獻土器が多数あった。しかしそ他の古墳には遺物が少ない。

なおE区南側斜面には古墳時代後期後半の横穴が2穴以上あった。

正面南5～8号墳については発掘調査はなされていない。

この遺跡は古墳発生を知る上で特に重要なものと言えよう。

2. 神原神社古墳 (No.3)

赤川の南岸に位置する。神原神社社殿の下にあったこの前期古墳は、昭和47年赤川改修に伴い発掘調査のち消滅し、石室のみ近くに移築された。

割竹形木棺をおいた長さ5.8mの狭長な竪穴式石室を主体とするもので、景初二年銘三角縁神獸鏡、素環頭大刀、剣、鉄鎌等や鎌、鍬等の農具類が副葬されていた。また石室外側

の上塙には朱の付着した土師器壺が、蓋石上には土師器壺と円筒形器台型土器が供獻されていた。これら出土遺物は重要文化財に指定されている。

なお墳形は明確ではないが、方墳であろうとされている。

3. 宿米塚古墳（No.19）

飯入根の墓との伝承のあるこの古墳は、神原神社古墳の立地に近く、約200m西の河岸近くにある。墳丘の四囲は削られ、或は町道敷として埋められており、墳形は明確ではない。墳頂には神原神社古墳の石室材と同質の板状石があり、中世の五輪塔片が集積されている。神原神社古墳や正面北の古墳群との関連が考えられる古墳である。

4. 川子谷古墳群（No.6）

昭和17・18年の偶然発見により知られるところとなった古墳群で、小高い丘陵上に点々と続く古墳群である。尾根によりA群とB群とに分かつ。

A群 1号墳…昭和18年発掘、箱式棺、人骨出土。3号墳…未発掘、8m位の方墳か。

2号墳…付近の人によって松根掘りの際箱式石棺発見、その年不詳。

B群 1号墳…昭和60年境界杭打ちで発見。昭和62年発掘調査（本誌Ⅱ編参照）。

一辺約9mの方墳。箱式石棺に男女2体重葬。副葬品なし。女子顔面に朱を認む。

2号墳 3号墳…墳形不明。頂部は削平されているか。4号墳…方墳、未発掘
このように発掘された事例からみると、いずれも主体部は箱式石棺であり、重葬例はあるが副葬品は見当たらない。古墳時代後期であろうか。

5. その他の古墳について

草枕地内には旧道に面して半壙露呈している竪穴式系石室の草枕古墳（No.20）が知られている。これは切石を用いており、現在奥壁部分が残存しているが、墳丘はほとんど旧状を失っている。

これと赤川を挟んで対岸の斐伊川と合流するあたりを眼下に、下神原上の山の稜線上に2基づつ2群で一辺約10mの方墳（No.46）がある。

これと類似するものに神原地区に隣接する大字宇治の仁王寺裏山稜線上に方墳4基が並ぶ古墳群（No.37）がある。丁度西隣りの尾根には神原正面北古墳群のA区が並行することになる。最頂部の1号墳は一辺約12mとやや大形である。

また大字三代・岡の高畦には現今の墓地によって半分を失った高畦古墳（No.49）がある。竪穴式石室とみられる石積み状況が断面に観察される。

横穴墓は赤川下流へ突出する支丘陵の突端近く、菅代（M.4）、土器廻（M.5）にあったが、赤川改修や土地改良の土砂採掘によって発見され、そして消滅した。

6. 遺物散布地について

神原地内字砂の宅地や畠地（M.42）付近は低丘陵に抱かれた緩斜地であり、宅地付近の工事箇所で土師質土器片や須恵器片が採取された。遺構は不明であるが、居住区域であったとみられる。字松ノ木谷半ばの畠地（M.50）からは、古く砥石や土器（須恵器）が採取されたとのことであり、字高土の道沿い山の中腹（M.39）あたりからも出土したとされる土師質土器が現存する。

これらは大まかに奈良・平安時代ごろの遺物とみてよかろう。

7. 経塚等について

後ノ廻経塚（M.13）（旧名称・神原経塚）は昭和49年偶然に発見されたもので、後ノ廻と相保廻谷奥の山頂に営まれたもの。12×15m 円墳状の中央に山石を積んで径1m 深さ80cm の礎をつくり、中に四耳壺に湖州鏡で蓋をして納めていたものである。下押原字京塚にある五輪塔遺跡（M.18）（旧名称・下神原経塚）は昭和44年赤川改修に伴い発掘調査されて消滅した。五輪塔群があったが埋納主体は不明確であった。神原と界を接して字能庭神社上方の丘陵端頭部（M.35）には川石の集石散布する土盛りが認められる。祭祀に関与する積石塚であろうか。これに隣接してN H K 加茂中継塔が造られている。

8. 古墓について

字土居の宅地上（M.43）あたりの山腹には五輪塔墓があり、山を削って出土した塔片がまとめられている。また字竹ノ内（M.41）、長山等の墓地内にも断片的に散在し、古くからの墓地であったことが知られる。字桜地内（M.40）の丘縁でも道路改良に伴い、埋没していた五輪塔・宝鏡印塔が多数発見され、さらに土師質土器1点も伴出した。これら神原地内の五輪塔はいずれも凝灰岩（キマチ石）製でほぼ同一様式のものであり、中世末期ごろとみられる。

大字三代・岡の大上家の横墓地内（M.48）にも五輪塔片が散在し、さらに中世後期から江戸時代前期に至る数種の宝鏡印塔が所在する。

9. 城壁について

字土居の突出する丘陵（M.44）は、削平加工された郭で構成されて土塁もあるまとまっ

た城郭で、大きな堀切りで独立させている。付近には家号「出」(土居の転訛か) や五輪塔古墓もあり、地域の拠点となる城砦であろう。大茶臼山頂部（N12）は旧来「神原城跡」と呼んでいたが、最頂部の小さな削平面とそれを圍むる1～2段の狭い平坦面があり、やや下って堅堀2か所の構成であり、城とは言い難く物見砦の様相である。展望には優れている。

大字宇治と界を接する字正面（N36）(正面北造路B区の続地)は、現在公園の一部として展望台等となり変形しているが、本来北へ下る3段の削平段から成る砦であり、東の宇能遙社方向への尾根は堀切りによって切断加工されている。また大字三代・岡の集落後背部（N47）には尾根道に沿って狭小な曲輪が点在し、簡易な堅堀もみられる。

以上の諸地点は大字三代との境界である丘陵上の尾根路によって相互に連絡しているとみられる。

また高城地内の丘陵頂部付近（N38）には、「馬乗鳥場」と呼ぶ広い削平地が数段設けられていたとのこと（岡田吉雄談）であり、城砦の存在したことは確かであるが、近年この地域一帯を桑園に拓いて大きく地形が変貌し、城砦の構成は不明のまま消滅した。

これらはいずれも中世後半期ごろの所産と思われるが、史料に散見される神原地頭下笠氏とどう関わるのかは不明である。

10. 高麻城跡（N23）

尼子・毛利攻防戦に登場する高麻城は、加茂町・大東町の境界にあたる急峻な独立峰であり、その城域構成は現在の両町にわたるとみられる。これまで山頂の主郭とその付近の数郭のみが知られていたが、今回は南へ西方へ延びる尾根について踏査した。尾根路が続き、特に小門谷からの登路には途中に城戸を設けたところが2か所認められた。また谷入り口部にあたる丘陵端には独立した砦が構築されており、搦手口の守備であったろう。またこの付近には『…屋敷、竹の内、など居館を指向する屋号等も遺存している。

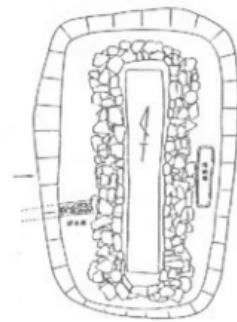
未踏査部分が多いので全容は不明であるが、規模の大きい典型的な山城である。



神原正面遺跡群



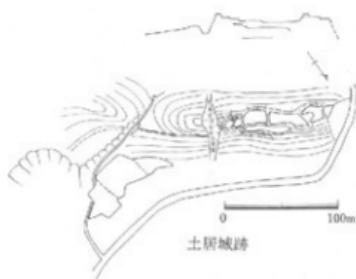
2号墳団



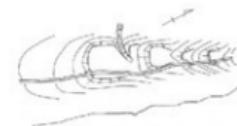
神原神社古墳の整穴式石室様式図
(風土記の丘資料館 図録より)



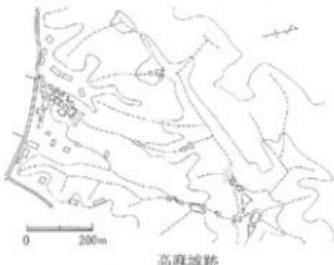
大茶臼山古墳跡



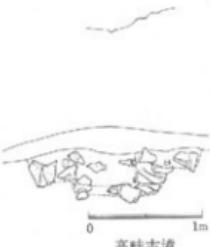
土居古墳跡



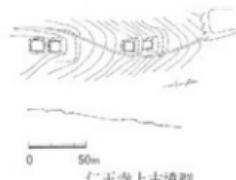
岡上古墳跡



高麻古墳跡

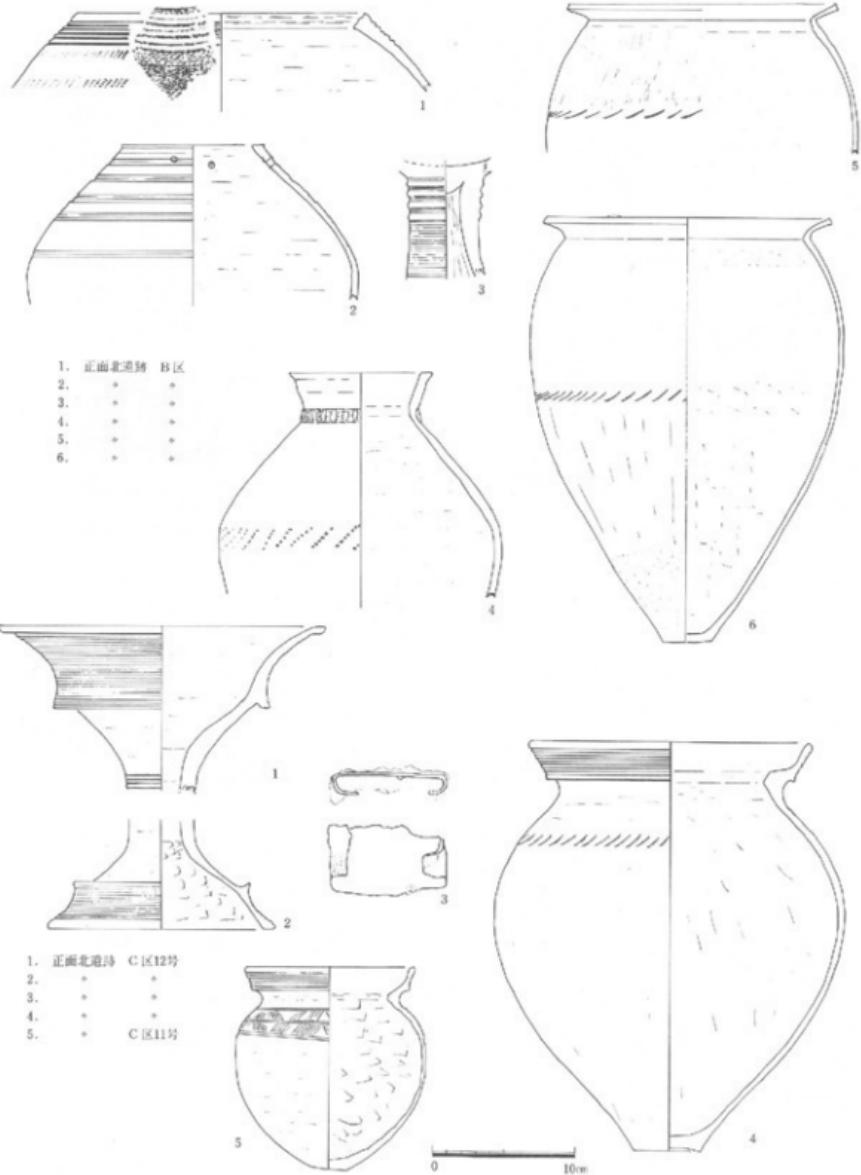


高峠古墳

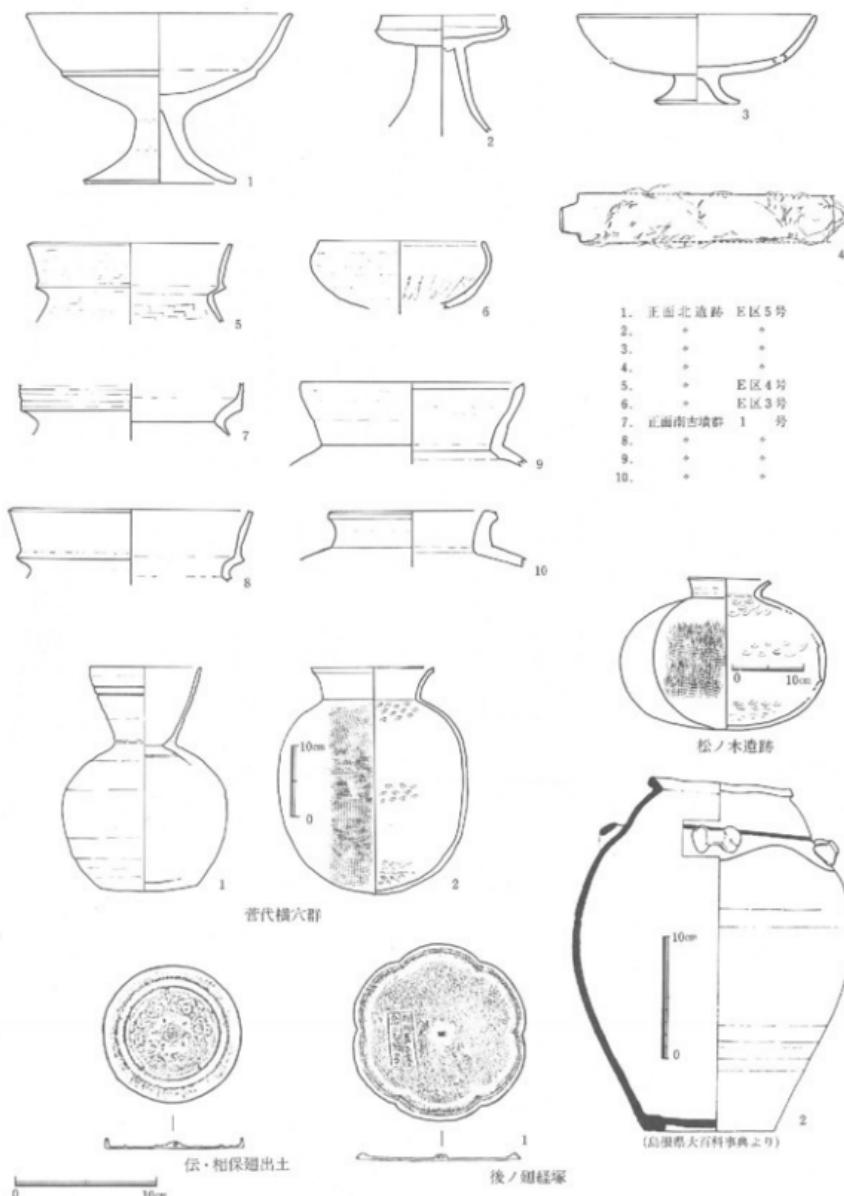


仁王寺上古墳群

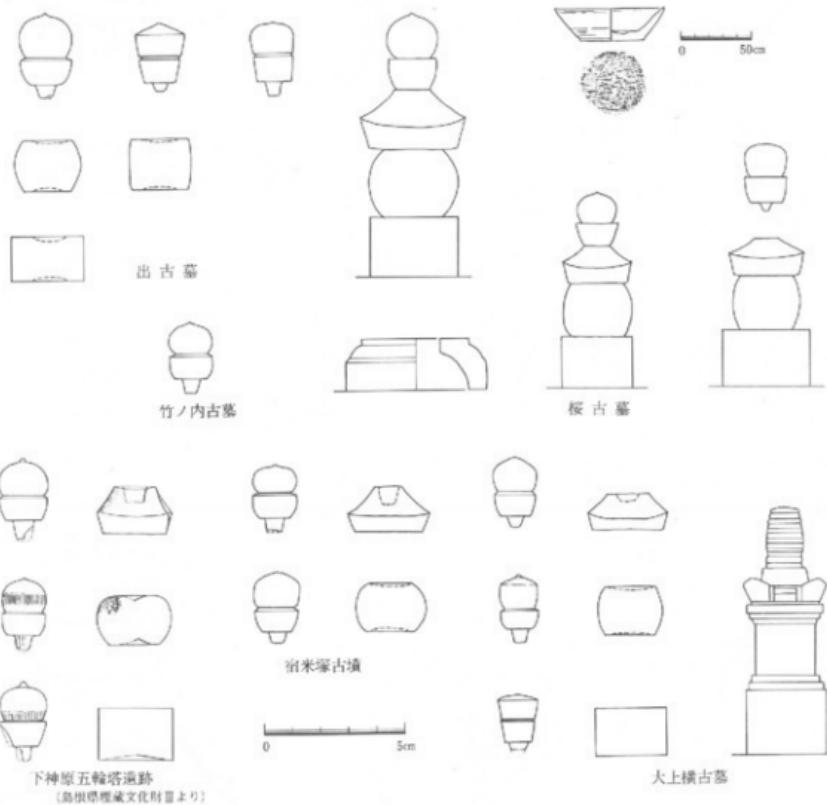
遺構図



遺物圖 (1)



遺物図(2)



遺 物 図 (3)

Ⅲ 川子谷古墳群B 1号墳緊急発掘調査報告

1. 位置と環境

この古墳は大原郡加茂町大字神原字川子谷に所在する。斐伊川の支流赤川の合流点から約1.5km上流の南側にあたり、北西に聞く馬蹄形の丘陵上に位置し、丘麓水田地帯からの比高は約50m、標高76mである。

北東約1kmの赤川南岸には神原集落の中心部があり、地内には最初3年銘鏡出土で知られる神原神社古墳がある。そのすぐ南の丘陵上にはかつて正面北遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代へかけての大古墳群があった。が、そのほとんどは中央公園の造成によって消滅した。

南へ250m尾根続きの山陵頂部には後ノ廻経塚（旧称・神原経塚）があり、四耳壺や六稜の湖州鏡が出土している。

赤川に沿って約0.8km西下すると、赤川を挟んで両岸に上器廻・菅代・猫里・穴ノ前などの横穴群や、異型小形竪穴式石室の草枕古墳群が周知されている。

なお、多量の銅剣・銅鏃を出土して著名な斐川町荒神谷遺跡は、本遺跡の北東約5kmにある。

このようにこの神原地区は古墳の密度の高い地帯であると言えよう。

2. 調査に至る経緯と経過

本墳を含む川子谷古墳群は、大略次のような経緯で知られるところとなった。大正年間であろうか付近の人によって掘り返されて石棺が破損し、今でも石材が散乱している。これがA群の2号墳であり、主体部内容等は不明である。

^(註1) 加茂町史考・本文編によると、昭和18年8月常松・中林画氏が松根を掘るのに際し、川子谷の丘陵の高まりで石棺に掘り当たった。石棺上の覆土約2尺、石室内法縦5尺7寸、横1尺3寸、深さ1尺1寸～1尺2寸で、側壁は小口各1枚、両側各3枚の板状石を以てし、蓋石は3枚とその上に4枚の目石を載せて合わせ口を塞いでいた。底には石なく、土の上に頭骨と脚部の骨が少々残っていた。副葬品は一つもなし。この人骨は現地に再埋葬した。なお付近には数基の円墳があるようだ、としている。これがA群の1号墳である。

そして昭和60年10月、山林の境界杭を打つに際し石棺蓋石に突き当たり、掘り返してみて古墳主体であることが判った。これがB群1号墳即ち当該古墳である。このとき蓋石を外し、棺内に入骨のあることを確認し、直ちに再び覆って埋め戻し町教育委員会へ通報した。しかし蓋石の目張り粘土が剥がれるなど防水上の不備が考えられることから、昭和60

年11月25日町教育委員会の要請により、杉原らが主体部の応急保護処置を行なった。この作業で掲乱の範囲や棺内の状況、遺骸の残存状況、蓋石等の状況を観察し、石棺には蓋石ののち、上をビニールフィルムで覆って防水処置とし、後日の精査に備えることとした。

またさらに付近を踏査してA群で上記のほかに1基、B群では2基以上稜線上に古墳が点在することが判った。

加茂町教育委員会は、計画していた神原地区遺跡分布調査の一環として当該古墳の緊急発掘調査を含めて行ない、棺内残存の人骨取上げと古墳の保存を行なうこととした。

発掘調査にあたって、人骨取上げを鳥取大学医学部法医学教室井上晃孝助教授に依頼することとし、日程打合せのうえ8月19日から発掘作業を開始した。なお、これに先だって川子谷古墳群の地形測量を8月11日から17までの間において行なった。

石棺内の調査は8月24日に行なった。人骨は2人重葬しており、先ず上方の1体の取上げ調査を行ない、次いで下方埋葬の1体を精掘測図してのち取上げた。採取点数は各35点でありかなりハードな一日であった。取上げた人骨はすべて鳥取大学医学部へ移して鑑定に付されることになった。また頭骨に赤色顔料が付着しており、この顔料について床土に滲透染色したものを試料採取し、上田健夫（古代学協会々員）に送付し、分析・鑑定を依頼した。

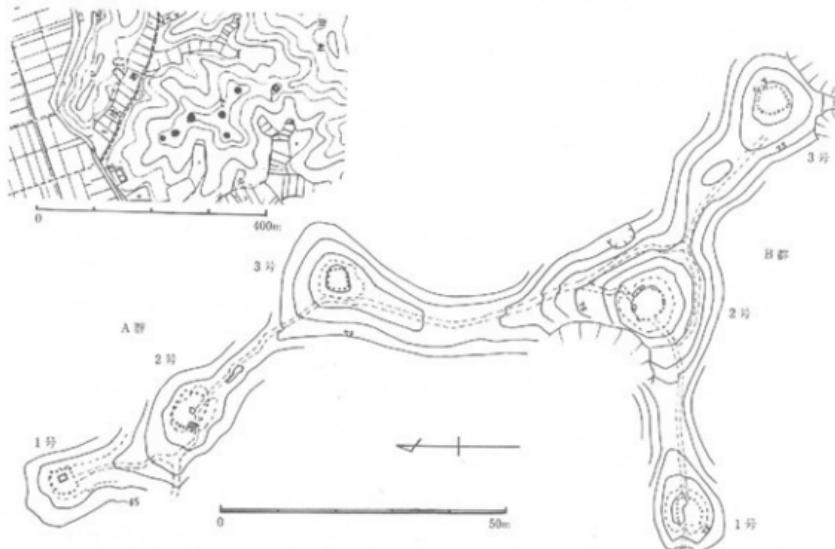


図1. 地形実測図

3. 調査の概要

1) 墳丘について

この丘陵上を山路が通っており、この墳頂でY字形に分岐して西南・西北へそれぞれ下っている。この路面によって墳丘面にわずかな凹溝ができている。この古墳はほぼ東西方向の尾根の高まりに営まれており、南・北はともに急峻な山腹となっている。

墳丘調査は主体部を中心に地勢に沿ってほぼ東西南北4方向のトレンチと、北西及び南西方向45°の補助トレンチを設けて、築造の状況を観察した。

墳頂部は現状では約25m程度が後世削られたと思われるが、北側の微高部分からみて本来丘陵上の高まり地形を削り出して整形したもので、盛土はほとんどなかったようだ。

墳形はわずかに長方形で、墳頂平坦面は $6.0 \times 4.5\text{m}$ で東西に長く、墳裾は削り出して自然地形に摺合わせたもので、約 $9.8 \times 7.3\text{m}$ を測り、その高さは約0.6mである。墳裾四隅にはテラスや溝等は認められなかった。

なおこの古墳の営まれた地山は風化花崗岩の橙色真砂土で、盛土はほとんどなく、表面は厚さ3~8cm程度の落葉~腐朽物質層(Ao層)で被われているのみである。

2) 埋葬施設について

埋葬主体は1基のみで、墳頂平坦面の中心から西へ約70cmの点を中心とし、ほぼ東西となるN84°Eを主軸とする箱式石棺が埋設されていた。

現地表下約35cmで蓋石にあたる。掘込みの上端は $2.7 \times 1.7\text{m}$ のやや不整な隅丸長方形である。蓋石

は 2.05×0.45

$\sim 0.75\text{m}$ の範

圍を6枚の板

石を用いて、

東から一部重

ね合わせなが

ら鉛伏せにし

たもので、棺

体をやっと覆

い得た程度の

被覆であった。

なお発見時の

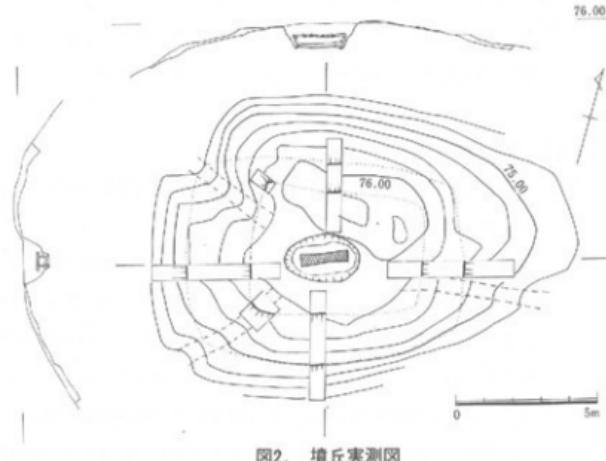


図2. 墳丘実測図

杭打ちでその中の1枚は破損していた。

棺体は同様な板状石を東西両小口に各1枚、南辺3枚、北辺は4枚と裏側副え石1枚とで造っている。床面には敷石はない。棺壁の上端には厚く粘質土が置かれ、蓋石によって押しつけ密封されていた。また蓋石相互間も粘質土で日張りされていた。堀り方は深さ約60cmで一段あり、さらに棺体部分のみさらに20cm掘り下げた簡易な二段掘りである。

先ず内法154cmとして東西両小口に高さ45~50cm、幅35cmの板石を地山にさらに掘り込んで掛りとし固定して立て、これを挟んで南北両辺の壁石を立てる。この長辺の場合は床面への堀込みではなく、堀り底に置くだけである。そして各壁石材の裏の隙間と棺内堀り底に真砂土を入れて搾き固めて固定している。従って棺底は8~10cm浅くなることになる。この南辺の側壁石は東から設置したもののように、次の石材はいずれも外側に一部重複させながら置いている。しかし北辺は東西両端から各2枚を同様に一部重複させ、中央で突き合わせをしており、この中央合わせ部はさらに外側に副え材を沿わせ、合計5枚で構成している。

棺壁の長辺はいずれも中央部で幾分内傾して狭くなり、小口壁は東西とともに外方へ強く傾斜して上端では168cmである。長辺の内傾は土圧によって生じたものとみられるが、小口壁の外傾は後述するように追葬に際し、棺長拡大のため意図的になされたものとみられる。

棺内法量は床面で長さ156cm、両端小口部幅35cm、中央部幅30cmのやや中細形で、棺の深さは掘き固めた床面まで27~33cmを測る。

棺の石材についてみると、厚さ7~18cm程度の板状で、強い板状節理の玄武岩の自然剥離によるもので、小口壁には厚手のものを充当している。

3) 埋葬状況

人骨の取上げは鳥取大学医学部法医学教室井上晃孝助教授の現場指揮の下に、人骨1片ずつについて検討を加えながら取上げを行なった。

棺内の人骨は重複した2体分であり、東西両端付近は蓋石との隙間から流入した土が堆積しており、その部分は人骨も消失していた。各人骨の配置は頭骨・下頬骨を除いて全体軸をよくとどめており、人為的な移動とみられるものは頭骨部のみであった。

棺内外に副葬品は全くなく、頭骨顎面部分には赤色顔料が鮮やかに付着していた。またこの顔料は、頭骨の接していた最上位置にある左大腿骨下端部にも付着していた。

人骨2体は取上げ順に上1号人、下2号人と呼ぶ。1号人は西頭位で2号人は東を頭

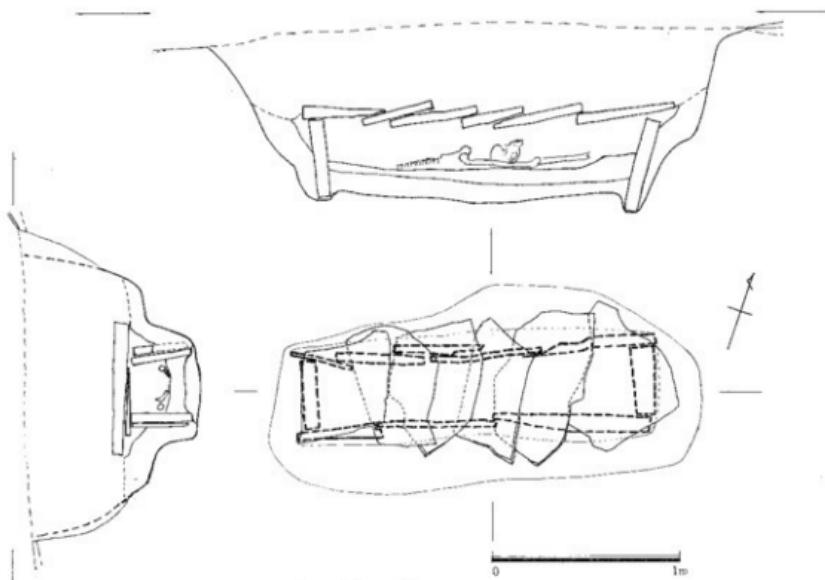


図3. 主体部

位にしており、対置重葬であった、姿勢はいずれも仰臥伸展位である。鑑定結果は2号人は年令20才代の女性で身長約145cm位、1号人は30才代前半の男性で身長165cm位、血液型はいずれもA型とされた。

1号入骨は胸部から上にあたる西端約45cm部分は、石棺西端からの土の流入のため消失しており、第10胸椎・肋骨の一部以下が残存していたが、四肢末端部分は消失していた。特に左足骨はまとまって左脛骨上にあること、右大腿骨下端と右脛骨上端はずれて食違っていること、また下2号人の頭骨が両大腿骨間に上下逆転して位置し、同様に下頬骨が両脛骨間にあったことが注目される。これは単なる自然の伸展位ではなく、右膝を立て左足先は小口壁に強く押し付けた姿勢であったと判断された。石棺の小口壁は東西面ともそれぞれ外方へ強く傾けて棺長168cm(上端)としており、一方1分人の身長は約165cmと判定されたことからすると、この被葬者は狭小な棺内へ無理に押し込んで埋葬したもので、前葬者の遺骨上棺内の空隙は深さ17~20cmしかなく、1号人の身長をもってすると、棺内の空隙はほとんど皆無に近いものと思われるほどに無理に押し込んだのであろう。

なお脚間に位置した頭骨は2号人のそれであるが、1号人の埋納に際し、一旦取上げておき、1号人を埋納安定したのち空隙部である脛間に再び置いたものである。そして



図4. 人骨出土状況

左膝部に接していたため大腿骨端部に顔料が転染したものである。

2号人骨についてみると、上記の如く頭骨と下顎骨は移動していたが、その他は体軸のままであり、残存状況はやや不良であるが人為的移動は認められず、東を頭位とする仰臥伸展位である。しかし東端約35cmの肩部以上については、土砂流入のため消失していた。

石棺の床面での長さは150cmあり、掘き固めた床土の上に真砂土を厚さ約10cm敷き、東側頭位付近を若干厚く敷いて高くして屍床としている。このようにして棺上端までの空隙は高さ約23cm前後、腰部付近にあたる中央部幅は約30cmのスペースとなる。

頭の位置は床土に赤色顔料の滲染によって判別できた。それによると東小口壁との間に約15cmのスペースがあったとみられる。身長が約145cmとすると、足端は西小口壁に接していることになる。また腰部での幅30cmは着服状態のままでほとんど隙間のない程の狭さであったと思われる。

頭骨位置については上記の如く、1号人を追葬した際に一旦取上げて追葬後に空隙部を選んで再埋納したためとみられるが、顔面を中心に赤色顔料の付着は2号人埋葬の際、棺内安置後蓋石で被う直前の段階で顔面又は頭部へのみ施朱したものであった。これはまた頭骨外面に付着している顔料がその内側にまで及んでいないことや、側壁又は蓋石内面等には全く顔料の付着が認められないことからも肯首し得る。

このように2体の人骨は、棺のはば中央で互いに恥骨端を接する位置で、相互対置に埋葬されていたもので、2号人埋葬後1号人を棺内を拡張して追葬したものとみられる。そして追葬の時期は2号人の白骨化後であり、数年以上の間隔が考えられる。

4) 埋葬方法と古墳の時期について

既に述べたように被葬者は男女の2人を箱式石棺に頭位を逆に置く対置の重ね合せて

追葬された重葬であり、先葬の女性の顔面には朱が施されていた。当初から追葬を予定した石棺でなく、短かったため追葬にあたって応急的に拡張したものであった。

近隣地域で箱式石棺への複数埋葬については、人骨を確認した事例は希であるが、
鳥取県向原6号墳の男女各3体合計6体を順次追葬した例、横田町大呂川向1号墳の女子2体で追葬例がある。^(注2) 鳥取県では倉吉平野に集中して知られているが、島根県ではほとんど知られていない。^(注3) むしろ岡山・広島等に多数みられ、男女2体の合葬が多く、時代は5世紀代が主である。^(注4) また横穴での例として、三刀屋町東下谷6号穴^(注5)での男女対置重ね合せが2組と幼児の5体の例も注目すべきである。

古墳での赤色顔料についてみると、最も近い字神原地内では神原神社古墳・正面北E5号墳^(注6)があり、上記の鳥取県大山町向原第6号墳にもみられる。また横田町大呂川向1号墳の場合は発掘所見は赤褐色顔料かとされたものの、その分析データは有機物であり顔料ではないとされた。

なお、この川子谷古墳群中A1号の箱式石棺については既述の如く中林季高氏の記録があり、これらの若干事例と当該古墳の場合を単純に比較してみたい。

先ず箱式石棺についてみると、大山町向原6号墳の床張り2人用設計とは異なり、横田町大呂川向1号墳や正面北C10-1号墳、及び本群中のA1号墳のように人体1軸がやっと納まる程度の法量しかなく、また底面にも床石を敷かないものである。東西両小口幅は等しく、中央がやや括れるが本来は長方形のプランとみられる。また蓋石についてみると、いずれも敷き並べて合端にはさらに目張り石を重ねることが多いのに対し、本例は一部重複して並べた鎧伏せであることも特例と言えよう。

石材は既述の如く、玄武岩の板状石を用いており、本墳を含む川子谷A2号墳・神原神社古墳・正面北C10-1号墳、さらに加茂・平田横穴内の箱式石棺もほとんど同一材質とみられる。このことから石材産地は極く近くで古くから産出していたと思われる。因みに中林氏は栗原（出雲市来原か？）石か或は大竹（加茂町大竹）の奥の産かとしており、地質図上では狭小ながら玄武岩の分布にほぼ一致する。しかしこれは後考にまつものである。

重葬についてみると、大山町向原6号墳の場合は男女2体を頭位同じに並置する推定3世代の順次追葬で、5世紀ほぼ全期にわたるものとされており、本例とは基本的にそのあり方が異なる。横田町大呂川向1号墳では女2体を検出したが、先葬骨を取上げておいて追葬し、先葬骨をその空隙に集骨状に並置したもので、土器から山陰での須恵器のⅡ期からⅢ期にかかる6世紀前半ごろと推定される。本例とは1人用棺への追葬は類似するが、女性2体であること、集骨されていることにおいて異なる。最も近い葬法

としては埋葬施設が横穴である点で異なるが、三刀屋町東下谷6号穴の場合が挙げられる。II号人（女）の上に頭位を逆にした対置でI号人（男）と、IV号人（男）の上に向様に対置したIII号人（女）が置かれ、さらにこれには幼児（性不明）が重なると推定される2組並列の対置重ね合わせで、いずれも上位人骨は追葬とされた。伴う須恵器により6世紀後半期である。

男女の重葬は例えば辻村氏によれば、主として山陽地域では合葬例中最も多くみられるとしている。このような先例からすると、山陰地域でも必ずしも特別な事例とは言い難く、今後事例が増すかと思われる。そしてこの男女はその葬法からして「極めて親密な間柄…夫婦関係か」とみられる。

近いところでの施朱例としては、神原神社古墳や正面北E5号墳など屍床面等に濃厚に赤色顔料が認められ、弥生時代にも出雲市西谷3号墓^(注1)等において認められる。人骨付着の事例としては向原6号墳が挙げられる。なお顔料としては確認できなかったが大嵐川向1号墳は2体とも顔面のみが赤褐色を呈しており、何らかの着彩かとみられたものである。山陽側においては箱式石棺内出土人骨の頭骨に赤色顔料の付着したものが随々検出されている。

これまで各地で数多い箱式石棺の調査事例のうち、施朱の行なわれたものはやはり限られた小数である。これは施朱の意味を考える上で重要な点の1つと言えよう。

顔料には水銀朱・ベンガラ等が考えられるが、本例とその近くである神原神社古墳、及び出雲市西谷3号墓^(注2)の場合はすべて水銀朱と判定された。時代的には異なるものの、注目すべきことであろう。

施朱も棺内全域から頭部付近の局所的なものまで種々考えられるが、大まかに弥生墓においては棺内全部を対称とするが、施朱風習の終りごろとされる古墳時代後期には頭部位に限られる傾向にあるとされており、施朱の盛行時は古墳時代前～中期ごろとも言われている。しかしそれとても全古墳全被葬者すべてに対してではなく、限られた被葬者であることはなお多くの検討を要することであろう。

本墳の場合は副葬品がなく、その時期を特定することはできなかったが、以上の諸例から類推すると古墳時代後期それも前半ごろの場合に近い様相かと思われる。

4.まとめ

1. 並該古墳は偶然発見されたものであるが、旧状がよく保たれており、墳丘及び主体部について知見が得られた。
2. この古墳は風化花崗岩の尾根上の高まりを削り出して方墳としたものであり、主体

部の中心に埋設された箱式石棺である。追葬後蓋石は鉛伏せとし、粘土で目張りしている。

3. 被葬者は男女2名で対置に埋葬されていた。先ず女子（2号人）が先葬され、数年以上経過し白骨化のち、男子（1号人）が追葬されたものと判断される。そしていずれについても副葬品は全くない。埋葬状況は三刀屋町東下谷第6号横穴のそれに類似する。
4. 板状の玄武岩を用いた箱式石棺は先葬女性に合わせた法量のものであり、埋葬に際し顔面を水銀朱で朱彩しのち蓋石で被っている。
5. 追葬された男性は、石棺小口を押し抜けてやっと棺内に埋葬し得たもので、その際に先葬女性の頭骨を移動させている。男性には施朱は認められない。
6. 初葬者2号人は20才代の女性で、血液型A型、身長約145cm、追葬された1号人は30才代前半の男性で、血液型A型、身長約165cmと鑑定され2人は夫婦関係かとされた。
7. 施朱は先葬された女性のみであり、顔面部位に限られていて、被葬者の身分と葬送儀礼を思わせるものである。この顔料は水銀朱と鑑定されたが、付近の神原神社古墳、西谷3号墓・正面北E5号墳との異同は判断されなかった。またその産地についても判断できなかった。
8. 石棺の石材については旧来「栗原石か」等と言われているが、材質は板状節理の玄武岩であり、神原神社古墳や本墳と群を同じくする川子谷A2号墳の場合も肉眼的観察では同質とみられる。
なお、「栗原」が斐伊川沿いの出雲市大津町来原であるならば、やはり玄武岩の露頭する地帯であり、本墳から西約8kmのところである。断定はできないが、本墳を含む神原地内の古墳にみられる他の箱式石棺石材も同じものとするならば、産地はこの来原あたりとみてよいのではなかろうか。
9. 本墳の時期に関しては副葬品も全くないことから決め手を欠くが、箱式石棺の様相、施朱と対置重葬などについて、近隣地帯との比較から大まかに古墳時代後期の前半ごろと思うのが妥当であろう。
さらに今後小古墳における重葬・施朱等の類例をまって再考すべきものと考える。
10. 人骨は鳥取大学医学部法医学教室に保管し、箱式石棺は現地で旧状に復し埋戻し保存することとした。

- 註 1. 中林季高：『加茂町史考 本文編』 昭和31年
2. 水野正好：「第6号墳発掘調査報告書」『向原古墳群』奈良大学・大山町教委 1982年
3. 杉原清一：「大呂川向古墳群緊急発掘調査概報」横田町教委 昭和61年
4. 辻村純代：「東中國地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」[季刊人類学14-2] 1983年
5. 三刀屋町教委：「東下谷横穴群発掘調査報告書」 1984年
6. 蓬岡法暉：「神原神社境内古墳発掘調査概況」[季刊文化財18号] 昭和47年
7. 蓬岡法暉：「加茂町の古代」『加茂町誌』 昭和59年
8. 島根県地質図編集委員会：『島根県地質図』 1982年
9. 井上亮季：本書
10. 田中義昭：「島根県西谷丘陵遺跡」[日本考古学年報 38] 1987年
11. 市毛一勉：『糸の考古学』 雄山閣 昭和59年
12. 上田健夫：本書

付編Ⅰ 川子谷B1号墳出土人骨について

鳥取大学医学部 法医学教室 井上晃孝

1. 概 要

島根県加茂町川子谷B1号墳の箱式石棺内には、図1に示すように、頭部を反対側にして下肢骨が交差するような形状で、上（1号人骨）、下（2号人骨）2体とも仰臥伸展葬であった。

2号人骨は下部の被葬者（女性）で、頭部を東側にしており、1号人骨は上部の被葬者（男性）で、頭位を西側にして埋葬されていた。

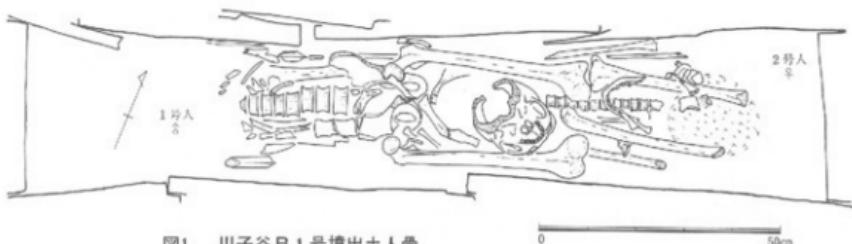


図1. 川子谷B1号墳出土人骨

0 50cm

2. 1号人骨

1) 保存状態

1号人骨の頭部には粘土質の土砂が大量に流入堆積し、頭蓋骨は埋没、風化のため完全に消失している。

残存部位は胸椎骨から下肢骨までで、かなりの消失骨はあるが、ほぼ骨格順に残存している。

2) 残存骨

椎 骨 胸椎骨：10～12の椎体上面のみ

腰椎骨：1～5の椎体のみ

胸 部 胸骨体：2片に破損

肋 骨：左右とも破片化しており数ヶ残存

上肢骨 桡 骨：左のみで骨体～遠位部

手 骨：左右とも中手骨、基節骨、中節骨若干

下肢骨 寛 骨：左右とも寛骨臼窩、閉鎖孔、恥骨部、坐骨とその他の部位

大腿骨：左はほぼ完形（全長440mm）、遠位部の内側上頸付近に朱付着

右は骨体中央部で破損、遠近両端とも一部欠損

胫 骨：左右とも遠位部欠損

腓 骨：左のみで骨体のみ

膝蓋骨：左のみ

足 骨：左は距骨、楔状骨、舟状骨と基節骨

右は蹠骨、距骨、舟状骨の一部

3) 性 別

骨盤の形状（恥骨下角、大坐骨切痕）、胸骨体の形状、長管骨は一般的に太く、頑健で筋付着部の凹凸が著明であることから男性と推定した。

4) 推定年令

恥骨結合面の形状と閉鎖孔内縁の棘が軽微に突出していることから、壮年（30代前半位）と推定した。

5) 推定身長

左大腿骨は完形で全長440mmであるので、各氏の推定式で算定した。

	安藤法 (1923)	藤井法 (1960)	T.藤法 (1961)	Pearson法 (1899)	Trotterらの法 (1952)
推定身長	166.8	163.6	166.0	164.0	166.1

身長は約165cm位と推定した。

6) 血 液 型

検体として本尾骨の右手の中手骨と左足距骨を用いて検査したところ、表2に示すようにいずれもA型と判定される結果を得た。

3. 2号人骨

1) 保存状態

頭蓋骨と下頬骨は定位より移動していたが、破損はあるものの原形をとどめている。

その他の骨格は仰臥伸展位の状態で、自然位のまま残存しているが、風化が著しく原形を保っているのは少ない。

頭蓋骨、下頬骨に朱様の付着物が認められた。

2) 残存骨

頭蓋骨、頭蓋骨、下頬骨は損壊はあるが原形をとどめている。

(1) 残存歯牙

○ ○ ○ ○ ● ●	● ● ● ○ ○ ○ ○
× 7 6 5 4 3 2 ×	× 2 3 4 5 6 7 8
× 7 × 5 4 3 2 1	1 2 3 4 5 × 7 ×
○ ○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ : 釘植歯牙
 ● : 遊離歯牙
 × : 歯槽開放

(2) 頭蓋計測値 表1に示す

マルチ 数	項目	計測値	備考	マルチ 数	項目	計測値	備考
8	頭骨最大巾	136.0		54	鼻 中	27.8	
9	最小前頭巾	90.7		55	鼻 高	49.7	
10	最大前頭巾	109.8		61	上顎歯槽巾	60.4	
11	肉耳巾	108.1		62	口蓋長	49.8	
15	後頭骨底巾	22.8		63	口蓋巾	37.3	
43	上顎巾	97.4		67	頬孔巾	51.8	
44	肉眼窩巾	90.0		69	頬高	36.1	
45	頸骨弓巾	123.4		70	下顎枝高	51.5	
46	中顎巾	104.7		71	下顎枝巾	35.1	
47	顎高	116.7					
48	上顎高	65.0		47/45	顎面示数(K)	94.6	狭顎
50	前眼窩間隔	23.3		48/45	上顎示数(K)	52.7	中上顎
51	眼窩巾(L)	35.7		52/51	眼窩示数(L)	87.1	高眼窩
	(R)	35.3			(R)	91.5	▲
52	眼窩高(L)	31.1		54/55	鼻示数	55.9	広鼻
	(R)	32.3		63/62	口蓋指數	74.9	狭口蓋

表1. 頭蓋計測値

椎骨 胸椎骨：1～11の椎体部のみ

胸部 胸骨：胸骨柄、胸骨体の一部

肋骨：左肋骨片8片

上肢骨 肩甲骨：右のみ、鳥口突起部のみ

鎖骨：右のみ、骨体のみ

上腕骨：左右1対、骨体のみ

橈骨：右のみ、骨体のみ

手骨：右のみ、破片化若干

下肢骨 窪骨：左右恥骨部のみ

大腿骨：左右1対、遠近両端部とくに遠位部風化が著しく脆弱化

膝蓋骨：右のみ

胫骨：左のみ、骨体骨片化

3) 性別

頭蓋骨の形態学的特徴、計測値。

四肢骨は一般的に細く、筋肉付着部の凹凸がなく、全般的にきしゃしゃであることから女性と推定した。

4) 推定年令

歯牙の萌出とその咬耗度 (Broca の 0 ~ 1 度) と恥骨結合面の形状から 20 代位と推定した。

5) 推定身長

大腿骨は左右とも残存するが、とくに遠位部の風化が著しく脆弱化しており、掘り上げが困難であり、現場での計測によると、右大腿骨の全長は 390mm であった。

各氏の推定式で算定した。

	安藤法 (1923)	藤井法 (1960)	工藤法 (1961)	Pearson 法 (1899)	Trotter らの法 (1952)
推定身長	151.4	148.4	153.5	141.2	150.4

平均値は 149cm であるが、身長は約 145cm 前後と推定する。

6) 血液型

検体として、本屍の下顎の歯牙 (4) を用いて検査したところ、表 2 に示すように A 型と判定される結果を得た。

検体	抗 体	血 球			未処理 血 球			酵素処理 血 球			判 定
		抗 A	抗 B	抗 O(H)	抗 A	抗 B	抗 O(H)	抗 A	抗 B	抗 O(H)	
1号人骨：脛(右手中手骨)	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	A 型
。 : 股(左足脛骨)	+	-	-	-	+	-	-	-	-	-	A 型
2号人骨：歯牙(4)	-	-	-	-	+	-	-	-	-	-	A 型
対照	既知	A型骨	+	-	-	+	-	-	-	-	A型
		B型骨	-	-	-	-	+	+	+	+	B型
		A型歯牙	+	-	+	+	-	-	+	+	A型
		B型歯牙	-	+	+	-	+	+	-	-	B型

表2. 血 液 型 檢 査 結 果

4. 考 察

1) 埋葬順序

本石棺内には男女2体が埋葬されており、2号人骨（女性）が下部に位置しており、仰臥伸展位で自然位のまま（頭蓋骨と下顎骨を除いて）である。

1号人骨（男性）は頭位を逆にして、下肢骨を交差する形状で2号人骨の上に位置し、仰臥伸展位で、骨骼順配列に乱れない。

骨の陳旧度からみても、第1の被葬者（初葬）は下部の2号人骨（女性）で残存骨の風化が著しいが、上部の1号人骨（男性）は第2の被葬者（追葬）であり、残存骨は比較的しっかりしている。

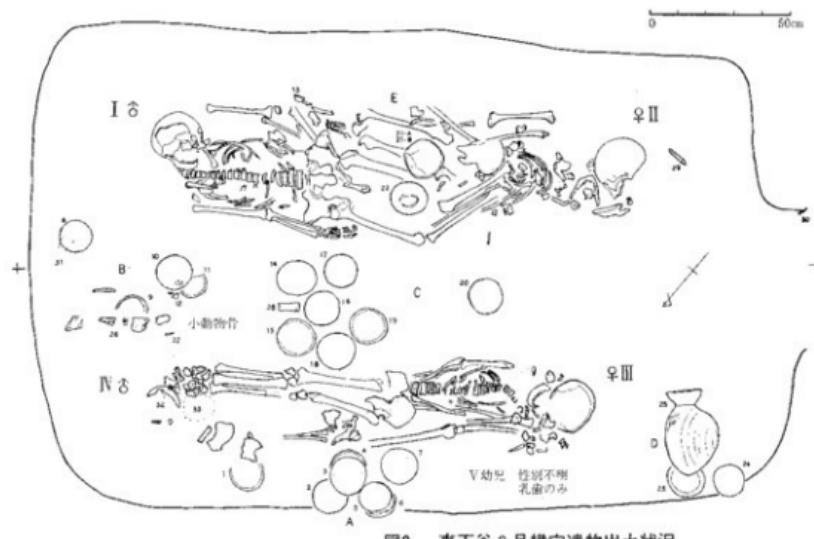


図2. 東下谷6号横穴遺物出土状況

人骨	骨の保存状態	性別	年令推定	身長推定	血液型	統柄
1号人骨	良好	男性	壮年(30代)	150cm	B型	夫?
2号人骨	やや悪	女性	壮年(25才前後)	147cm	A型	妻?
3号人骨	やや良好	女性	壮年(20代)	143cm	B型	妻?
4号人骨	悪い	男性	壮年(30才前後)	154cm	B型	夫?
5号人骨	不良	不明	幼児(2~5才位)	不明	B型	児?

表3. 6号横穴墓の人骨

2) 被葬者間の関係

1号人骨：男性；壯年（30代前半位）

2号人骨：女性；壯年（20代）

被葬者同志は頭位を逆にして、下肢骨を交差する形状で、上下に仰臥伸展位で埋葬されていた。

被葬者同志はかなり親密な関係が想定され、夫婦関係が思量される。

このような形式をとる自駆例として、島根県三刀屋町東下谷6号横穴墓がある。この横穴墓には成人男性2体、女性2体と子供1体の5体が検出された。^(注)

図2に示すように、玄室入口から左右にそれぞれ2体ずつ1対（男女）となって、反対方向から下肢骨が交差する形状で埋葬されていた。さらに1対の男女の遺体のそばの床砂の中から幼児の歯牙（乳歯のみ）が検出された。表3に示すように家族墓としての性格が窺われる。

本例は箱式石棺であり、三刀屋町東下谷遺跡の場合は横穴墓である。

山陰地方におけるこのような埋葬形式について今後さらに文献的考察を試みたい。

3) 推定身長

1号人骨と2号人骨の大脛骨から5氏の推定身長式で算定したところ、1号人骨（男性）は163.6～166.8cmの範囲内ほぼ近似的な身長値がえられた。がしかし、2号人骨（女性）の場合141.2～153.5cmとかなり大きなばらつきがみられ、とくにPearson法では141.2cmと最も低い値を示した。この身長値が果たして生前の身長値に近いかどうか不明である。

考古学では推定身長式にPearson法がよく常用されており、これまでの文献と比較考察する上で同一式を用いることは当然としても、幾分低い身長値ではないかと推察している。

現在、各時代毎の身長推定式がなく、明確なことは不明であるが、單一の推定身長式を用いると極端な値がえられることがあり、推定式の採択に当たってはかなり慎重を要すると思われる。

4) 2号人骨の頭骨の位置

2号人骨（女性）の頭蓋骨と下頬骨が定位位置ではなく、1号人骨（男性）の左右の下肢骨間に位置している。

これらの移動が自然にころがったものと仮定すると、とくに頭蓋骨の場合1号人骨の下肢骨が隔壁になり、説明がかなり困難となる。

むしろ先に2号人骨が埋葬され、白骨化した段階で1号人骨が追葬されるに及んで、

2号人骨の頭蓋骨が1号人骨の左右の下肢の間に何らかの理由で人為的に移動された疑いがある。

5) 身体的特徴

鼻中隔弯曲：2号人骨（女性）の鼻腔において、軽度の鼻中隔弯曲（左側に弯曲）が認められた。

う歯：2号人骨の下顎左右の第2小白歯にう歯（虫歯）が認められた。

5. まとめ

加茂町川子谷B1号墳の箱式石棺内には、男・女2体が頭位を反対にして、上下に下肢部を交差する形態で、仰臥伸展位で埋葬されていた。

1号人骨は男性、推定年令は壯年（30代前半位）、推定身長は約165cm位、血液型はA型である。

2号人骨は女性、推定年令は20代、推定身長は約145cm前後位、血液型はA型である。埋葬順序は下位の2号人骨（女性）が初葬であり、次に上位の1号人骨（男性）が追葬された。

被葬者同志の関係は男女であり、上・下に下肢骨を交差して埋葬されており、極めて親密な間柄が推察され、夫婦関係が思量される。

註：島根県三刀屋町教育委員会：東下谷横穴群発掘調査報告書（1984）

写真の説明

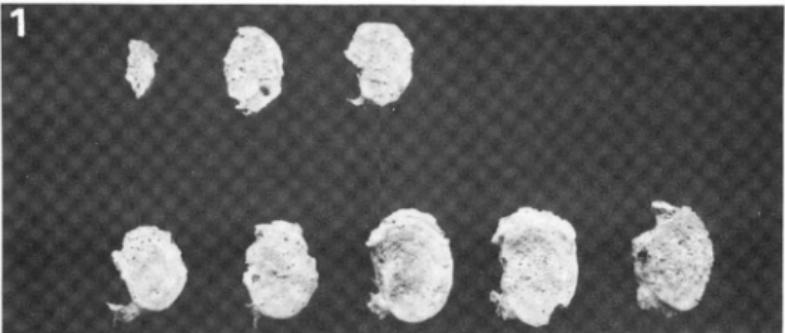
1号人骨（1-4）

- 1：上、胸椎骨（10-12）
- 2：下、腰椎骨（1-5）
- 3：寛骨（左右）
- 4：胫骨（左右）と腓骨（左）

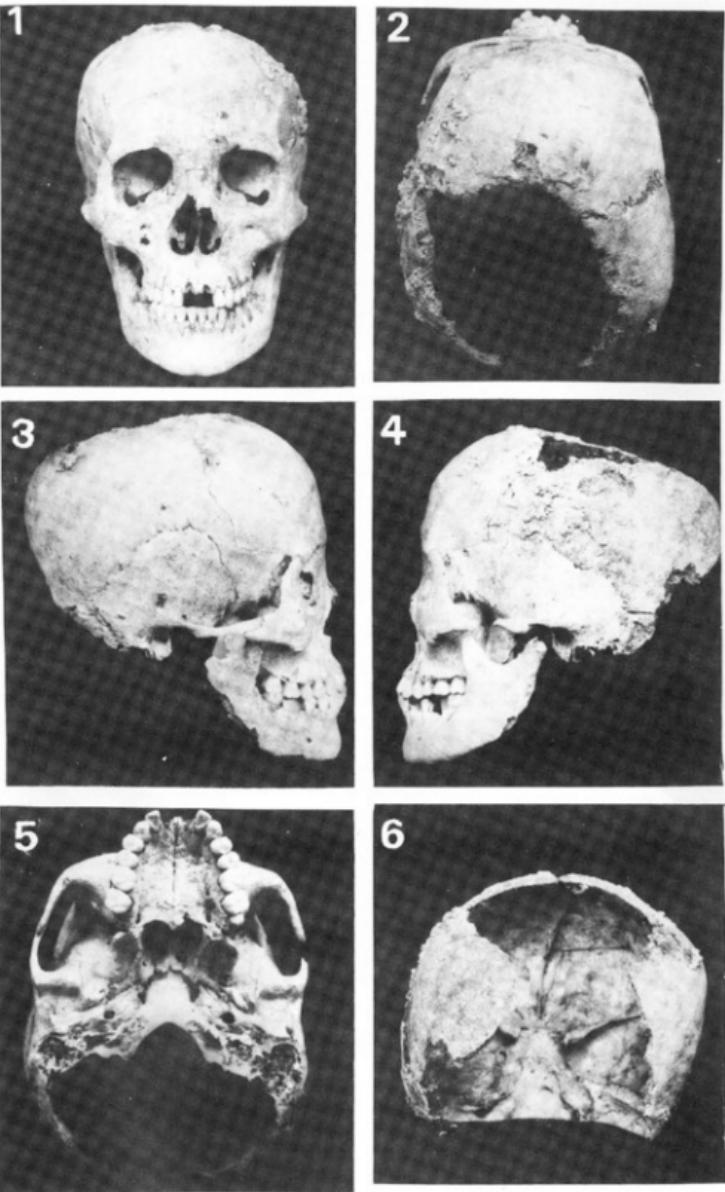
2号人骨（1-10）

- 1：頭蓋骨 正面
- 2： 夕 頭頂面
- 3： 夕 右側頭面
- 4： 夕 左側頭面
- 5： 夕 頭蓋底面
- 6： 夕 後頭面
- 7： 夕 上顎面
- 8：下顎骨 上前面
- 9：胸椎骨（1-11）
- 10：大腿骨（左右）

1号人骨

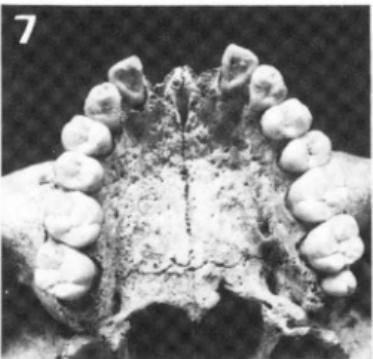


2号人骨



2号人骨

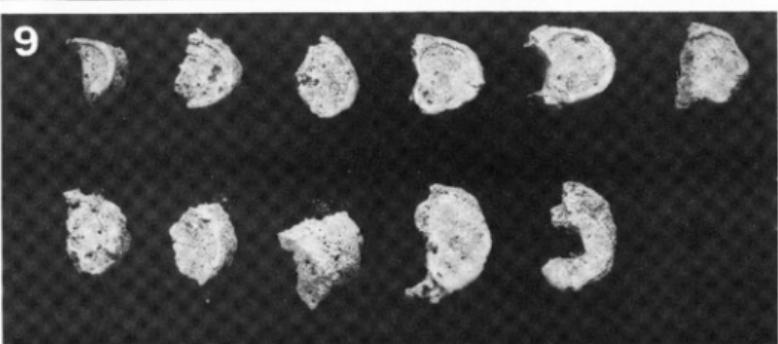
7



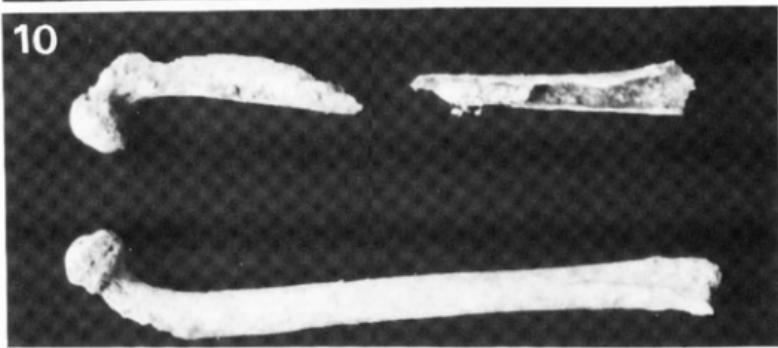
8



9



10



付編Ⅱ 島根県加茂町川子谷B1号墳出土の朱色顔料

古代学協会会員 上田健夫

1. はじめに

川子谷B1号墳の組合せ箱式石棺内には、男女の2遺体を上下に重ねて埋葬していた。下位の女性の頭骨は原位置から40cmばかり転移していたが、顔面に当る部分には朱色の顔料が付着し、また頭骨の原位置の床土は朱色に染まっていた。この朱色の顔料が水銀朱なのか、ベンガラなのか、或いは赭土なのか、これを検証するため、X線を利用して同定することにした。

水銀朱とは辰砂の粉末のことである。辰砂はまた朱砂とも呼ばれている。化学組成式は HgS で、化学では硫化第二水銀と称している。またベンガラとは赤鉄鉱の粉末のことである。化学組成式は Fe_2O_3 で、化学では酸化第二鉄と呼んでいる。インドのベンガル地方では、古来この地方に産する淡黄赤色の風化土壤を焼き、赤色化したものを塗料・顔料として用い、また海外へも輸出していた。我が国ではこれをベンガラと呼んだ。ベンガルが詮ったものである。したがって、ベンガラはもともと赭土であって、水酸化鉄 $Fe(OH)_3$ （褐色）が風化土壤に滲染したものである。水酸化鉄は加熱すると赤鉄鉱と同じ化学組成のものになる。



自然界ではこのような反応が徐々に起きている。辰砂や赤鉄鉱は結晶質であるが、水酸化鉄や上記のような過程を経て生成した酸化第二鉄は非結晶質である。

赭土は既に明らかのように、風化土壤特に粘土質の風化土壤に水酸化鉄が滲染したものである。

2. X線回折法

自然界の無機物質は多くの場合結晶質として存在する。結晶質の物質をX線で照射すると、結晶質物質はそれぞれ特有の回折X線を発生する。結晶質物質を同定するに当っては、X線回折装置を用いる。粉末にした試料をガラス板の表面に塗抹し、これを一定波長のX線で、ガラス板を連続的に回転しながら、照射する。結晶質物質から発生する回折X線の回折角と強度を自動記録装置によって記録させると、第1図のような回折图形が得られる。このような回折图形を解析すれば結晶質物質が何であるかがわかる。

3. 蛍光X線分析

結晶質であれ、非結晶質であれ、物質をX線で照射すると、これを構成している各原子はX線を放射する。これを蛍光X線という。蛍光X線の波長は元素によりそれぞれ固有である。蛍光X線分析を行なうには蛍光X線分析装置を用いる。粉末にした試料をふつうプラスチックの容器に入れ、これをX線で照射すると、各原子は元素の相違に応じて、それぞれ固有の波長の蛍光X線を放射する。弗化リチウムの結晶板を連続的に回転させながら、蛍光X線をこれによって回折させ、回折X線の回折角と強度を自動記録装置によって記録させる。そうすると第2図のような回折图形が得られる。このような回折图形を解析すれば、物質の構成元素を知ることができる。

4. X線による同定の利点

X線回折法では、

- 1) 試料の量は「耳かき」に1杯程度でよく、また異物がまじっていても一向差支えない。
- 2) 50分以内に結果が得られる。
- 3) X線を照射しても試料は何等変化しないから、照射後の試料を別の研究試料として提供することができる。

しかし非結晶質の物質は回折X線を発生しないから、この方法は適用できない。

蛍光X線分析では、

- 1) 試料の量は「耳かき」に5杯程度でよい。
- 2) 100分以内に結果が得られる。
- 3) X線を照射しても試料は何等変化しないから、照射後の試料を別の研究試料として提供することができる。

しかし普通の蛍光X線分析装置では原子番号1の水素から原子番号19のカリウムまでの軽元素は検出できない。このような軽元素まで検出しようと思えば更に特殊な装置が必要である。

5. 試 料

試料として、頭骨の原位置の朱色の床土を採取した。したがって試料は床土の構成物質とこれに汚染した朱色の物質とから成る。今回朱色の物質を純粋に分離することは不可能であった。

6. 実験とその結果

朱色の床上によるX線回折の图形を得るに当っては、X線回折装置を次の諸条件下で稼

動させた。

Radiation	: Co - K α	Voltage & Current : 35kV & 10mA
Filter	: Fe	Time constant : 4 sec
Scanning speed	: 1°/min	Chart speed : 1 cm/min
Room temperature : 21°C		

得られた图形の一部分を第1図として掲げておく。

图形を解析して、朱色の床土は水銀朱、石英、斜長石（斜長石のうちの中性長石）、ハロイサイト、加水ハロイサイトで構成せられていることが判明した。よって、もともとの床土は石英、斜長石、それに粘土質鉱物のハロイサイト、加水ハロイサイトなどの鉱物から成るものである。

次に蛍光X線分析の图形を得るに当っては、蛍光X線分析装置を次の諸条件下で稼動させた。

Radiation	: W	Voltage & Current : 50kV & 25mA
Analyzing crystal	: LiF	Detector : NaI scintillation counter
Time constant	: 4 sec	Scanning speed : 2°/min
Chart speed	: 2 cm/min	Room temperature : 21°C

得られた图形の一部分を第2図として掲げておく。

图形を解析して、Cr、Fe、Ni、Cu、Rb、Zr、Hgなどの重元素の存在が確認せられた。ピークの高さ、幅から判断すれば、これらの元素の多寡は第1表のようである。

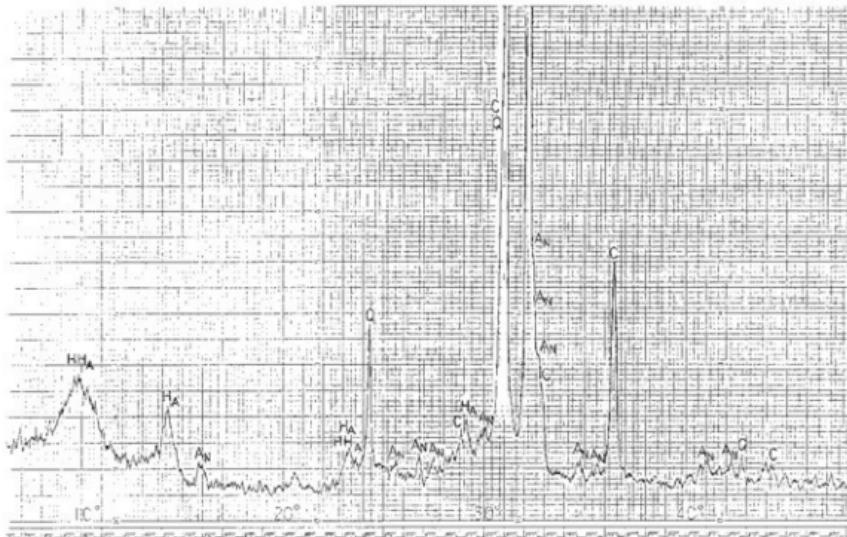
第1表 床土の中の重元素の多寡

元素	Cr	Fe	Ni	Cu	Rb	Zr	Hg
多寡	+	+	-	+	+	+	+
	+	+	-	+	-	+	+
	+	+	-	+	-	+	+
	+	+	-	+	-	+	+

「+」の個数は多い、少ないのめやうに過ぎない

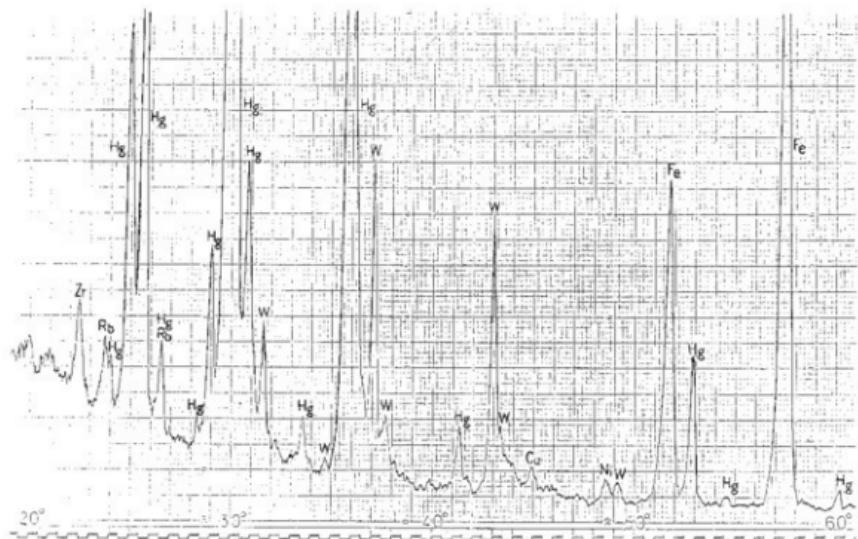
Hg（水銀）は水銀朱の成分である。Fe（鉄）が可なり存在しているが、これがベンガラの存在に由るものでないことは、先きのX線回折によってベンガラが存在していなかったことによって証明される。鉄分は岩石の風化土壤中には非結晶質の水酸化鉄または酸化第二鉄として常に存在するものである。（多量に存在するときは土壤は赤色を帯び、所謂鉛土となる。）

地表から地下16kmまでの地殻の表層部に於ける元素の平均存在量をppmで表わした数字がある。これを「クラーク数」と呼んでいる。第1表の7元素について、クラーク数、クラーク数の順位、更に今回筆者が使用した蛍光X線分析装置では検出されない軽元素を除



第1図 床土のX線回折图形

C:水銀朱 Q:石英 AX:斜長石(中性長石) HA:ハロイサイト HHA:加水ハロイサイト



第2図 床土の螢光X線分析

Fe:鉄 Ni:ニッケル Cu:銅 Rb:ルビジウム Zr:ジルコニウム Hg:水銀

(上図の範囲内ではCrのピークは現われない。またWはタンゲステンの対除板を使用したためである。)

外したクラーク数順位を第2表に掲げた。第2表で見られるように、Cr、Ni、Cu、Rb、Zrなどの元素も地殻の表層部では存在量の多い元素である。

第2表 7元素のクラーク数とクラーク数順位

元素	Cr	Fe	Ni	Cu	Rb	Zr	Hg
クラーク数 (ppm)	100	56300	75	55	90	165	0.08
クラーク数の順位	21	4	23	26	22	18	67
軽元素を除外したクラーク数の順位	9	1	11	14	10	7	51

これらの元素は床土の構成鉱物、特にハロイサイトや加水ハロイサイトのような粘土質鉱物の表面に吸着されていたものと思われる。粘土質鉱物は吸着力が大である。これらの元素の存在から何かを推論しようとしても目下のところ何の手懸りも得られそうにない。

7. 日本列島に於ける施朱の風習

日本列島に住みついていた人びとが天然産の朱色の顔料を利用して、器物（七器、土偶、装身具など）に「色付け」をし始めたのは縄文早期であると考えられている。

一方遺体に朱色の顔料を塗布または撒布する風習が現われ始めたのは縄文後期ないし晩期である。弥生時代には遺体のみならず木棺、石棺、壺棺などの内部や上蓋にも朱色の顔料を塗布または撒布する風習が現われた。

このような施朱の風習は弥生時代の晩期から古墳時代の中期、即ち3世紀後半～6世紀初頭に於いて最盛期を迎へ、石棺の内側、外側を始め堅穴式石室、粘土櫛、横穴式石室などの内側にまで朱色の顔料が塗布せられるようになった。しかし古墳時代の後期になると、この風習は急速に衰退した。したがって横穴式石室では古いもの以外は施朱せられているものは少ない。

施朱の風習に於いて、使用せられた朱色の顔料にはベンガラ、水銀朱そして赭土の3種あることが既に指摘せられていたが、残念ながら理化学的な同定が行なわれなかつたため、朱・丹・赤色顔料などと呼んで報告せられて來た。

8. 朱色顔料の理化学的同定

1967年、安田博幸氏は兵庫県尼崎市の川能遺跡（弥生の前・中・後期に亘る遺跡）に於ける16号木棺内の遺骸の顔面骨に付着していた朱色の顔料を濾紙クロマトグラフ法によつて調べ、水銀(Hg)の存在を検出した。このような方法では水銀朱(HgS)そのものであることを実証したわけではないが、被検物質が朱色であったことから水銀朱であると考えてよい。これが遺骸に水銀朱が塗布（撒布）せられたことの実証第1号である。

次いで1974年、矢嶋澄策・中村忠晴の両氏は千葉県市原市菊間町の新皇塚古墳（前方後方墳、5世紀初頭の築造）内の遺骸に付着していた朱色の顔料及び壙底の朱色の顔料をX線回折法によって調べ、水銀朱であると同定した。X線回折法によれば、直接水銀朱そのものであることが証明できるのである。

9. 島根県内の施朱古墳

島根県内に存在する古墳のうち、施朱古墳として、市毛 熊氏は10基を挙げている。また前島己基氏は5基を挙げている。これらの5基は、

- | | |
|----------------|---------------|
| (1) 仲仙寺古墳群 9号墳 | (4) 神原神社古墳 |
| (2) 同 10号墳 | (5) 順庵原遺跡 1号墳 |
| (3) 宮山 4号墳 | |

である。しかしこれらの古墳出土の朱色顔料がいったい何であるのか、検証せられることなく放置せられている。

筆者は幸いにも、1985年夏以降、島根県内の古墳6基、鳥取県内の古墳5基から出土した朱色の顔料をX線回折法及び蛍光X線分析によって同定する機会をうけられた。これで合計11基の古墳のうち、島根県内に存在する次の3基の古墳の朱色顔料のみが水銀朱であることが確認できた。

- (1) 西谷丘陵古墳群3号墓 (2) 川子谷B1号墳 (3) 神原神社古墳

西谷丘陵古墳群3号墓は渡邉貞幸氏によれば弥生後期後半に、また神原神社古墳は前島己基氏によれば古墳前期に築造せられたものである。川子谷B1号墳では副葬品が出土しないから、築造年代を推定する手掛りがないわけであるが、杉原清一氏は墓の型式や埋葬様式から古墳後期初頭ごろか、としている。

10. 水銀朱の産地特定の困難さ

鉱物学によると、鉱物にはその結晶内に不純物を含み易いものと、殆ど含まないものがある。水銀朱は正に後者に属する。水銀朱中に含まれている不純物を調べて、その産地を特定しようとしても、この方法では産地特定に成功しないと思う。

マグマは上昇により次第に冷却して先ず岩石をつくり、岩石をつくったとの残骸から鉱脈をつくる。水銀朱は残骸が上昇冷却して行く過程の終末期に晶出され、既存の岩石の比較的地表に近い部分に細脈状に、または散点状に賦存する。

Kuznetsov等の研究によると、水銀朱は多くの場合、黄鉄鉱、輝安鉱、硫砒鉄鉱、鷺冠石、雄黄を、稀には閃亜鉛鉱、黄銅鉱を伴い、また非金属鉱物として石英、方解石、重

晶石、萤石、白云石、種々のカオリン族鉱物を伴うという。しかしこれらの鉱物がすべて常に共伴するわけではなく、産地毎に組合せやその量比が異なるということである。ここに水銀朱の産地特定の道がひらけている。

ところで、水銀朱のかつての産地として、松田寿男氏は関東から九州に亘り47個所を挙げている。これら47個所のほか更に東北から九州に亘って、45個所が古代の水銀朱の産地として適格であると述べている。松田寿男氏が挙げている合計92個所は現在水銀朱を産しているわけではない。したがって、これらの産地の水銀朱の共伴鉱物について調査研究できない。ただA墓壙出土の水銀朱とB墓壙出土の水銀朱について、それらの共伴鉱物を細密に研究することによって、両者の水銀朱の産地が同一であるか否かを知ることができる場合があるかも知れない。

11. 施朱の風習の時間的・空間的ひろがり

日本列島では施朱の風習は既に述べておいたように、縄文後期ないし晩期に現われ、古墳時代の後期には殆ど消滅している。

A. ヨーロッパ

ヨーロッパ大陸では施朱の風習の起源は極めて古く、遙るか数万年前に遡ることができる。ここでは、ほんの数例を挙げておく。

- 1) 最も古いものは南西フランスの La Chapelle aux Saints の洞窟の中の墓壙から出土した人骨である。この人骨はネアンデルタール人に属し、ムスティエ文化期 (BP70,000~35,000年) の終末期 (BP40,000~35,000年) に埋葬せられたものであることが包含層の古さから明らかにせられている。頭骨の部分には朱色の粘土が付着しており、傍らにはバイソンの大軀骨と珪藻土製の器が副葬せされていた。
- 2) オーリニヤック文化期 (BP32,000~20,000年) のものは甚だ多い。北部イタリアの Cavillon 洞窟内の墓壙から出土した人骨はベンガラを振りまいた床土の上に横たわり、骨や副葬品は著しく朱色に染っていた。カタツムリの貝殻、孔を穿った鹿の歯、骨製の短刀、プリント製の刃などが副葬せされていた。
- 3) イギリスのサウス・ウェールズにある Piviland 洞窟の中の墓壙から出土した人骨には臍上³がふんだんに撒布せられていた。傍らには象牙製や貝殻製の装身具、骨器、石器などが副葬せされていた。この人骨は発掘当時はオーリニヤック文化期に埋葬せられたものと考えられていたが、その後¹⁴Cによる年代測定が行なわれ、その古さはBP18,400年であることがわかった。したがって、オーリニヤック文化期の次のソリュートレ文化期 (BP20,000~17,000年) の中頃に埋葬されたものである。

イタリアの北部や中部の地中海に面する地域、シシリー島、マルタ島などでは、中石器時代（地域によって異なるが、大体BP10,000～7,000年）の墓壙でベンガラまたは赭土を施朱したものが多い。

イベリア半島、北欧、バルカン半島、南ロシアそれにパレスチナなどでは、新石器時代（地域によって異なるが、大体BP7,000～4,500年）の墓壙でベンガラまたは赭土を施朱したものが数多く発見せられている。

施朱の風習はヨーロッパ大陸では青銅器時代（地域によって異なるが大体BP4,500年～3,000年）の初頭に到って漸く衰退したようである。また施朱顔料として利用せられていたものは殆どの場合ベンガラか赭土である。水銀朱が利用せられていた例は極めて少なく、それらは新石器時代の終末期ないし青銅器時代初頭の墓壙である。

水銀朱が発見せられて塗料・顔料として利用され始めたのは、ヨーロッパ大陸ではベンガラや赭土に比較して遙かに新しく、新石器時代に入ってからであることが知られている。

B. ヨーラシア大陸北東部（シベリアのバイカル湖以東、黃河流域以北）

1) 北京の南西約50kmのところにある山頂洞窟¹⁹で発見せられた3個の頭骨と軀幹骨の周りにはベンガラが散布せられていた。山頂洞人の時代は¹⁴Cによる年代測定によって、約BP18,000年であることが知られている。

2) カムチャッカ半島のほぼ中央部に位置するウシュキ1号遺跡²⁰内の墓壙庭には多量のベンガラが散布されており、墓壙の埋め土にもベンガラの塊りや炭が含まれていた。¹⁴Cによる年代測定で、埋葬の年代はBP14,300±200年、BP13,600±250年であった。またウシュキ4号遺跡（住居址）からは多量のベンガラと幾つもの赤鉄鉱の塊りが発見され、更に赤鉄鉱を碎いてベンガラを作ったと思われる砂岩板と火山弾とが見つかった。火山弾の一端にはベンガラが付着していた。

3) イルクーツク市にある新石器時代の「ロコモチフ」遺跡²¹では、墓壙内の遺骸に赤褐色の赭土が多量に付着していた。頭蓋骨と指骨の部分の赭土は特に濃厚であった。同じ遺跡の別の墓壙では擦り減らされた痕跡のある赭土の塊りと、それを擦り減らした灰色の砂岩製の砥石が発見せられた。

中国で発見せられた施朱墓のうち、新しい時代に属するものの1つは陝西省普渡の墓壙²²である。これは西周時代（BP3,000～2,800年）のものである。しかし中国では地域によっては、前漢時代まで施朱の風習が存続したようである。

（例、湖南省長沙の馬王堆1号漢墓²³）

このように、施朱の風習について、その時間的・空間的なひろがりを考慮すると、この風習はヨーラシア大陸を西から東へ伝播して行き、遂に海を渡って日本列島にまで波及し

たように思われる。

12. 施朱の風習の目的

施朱の風習はいったい何を目的としたものであろうか。明治時代以降、日本の考古学者によって提起せられた見解は魔除け、防腐、化粧、権威の表現、鎮魂などである。西欧の考古学者の間にも防腐のためであると唱えた学者もいるが、今日では「Lebender Leichnam」の信仰に基づくとの見解で彼等はほぼ一致している。Lebender Leichnam の直訳は「生きつつある死者」であるが、この信仰は「死は一切の終焉ではなく、単に現世の終りであって、来世の始まりである。死者は来世に於いて生きづける」というものである。副葬の風習や施朱の風習に関して、Scharff¹⁸、Obermaier¹⁹、Wilke²⁰、v.Duhn²¹ 等の見解を要約すると、「古代の人びとは Lebender Leichnam の信仰により、死者が来世の生活で不自由しないよう、現世で使用していた日用品、愛用していた装身具を始め、食料、武器なども副葬し、同時に生命と活力の象徴である朱色の顔料を頭部や胸部、時には全身に塗布（撒布）して、来世の生涯を元気に、つがなく過ごして行けるよう願ったようである」ということになる。中国の賈蘭坡も同様の意味のことと述べている。

現代の文明社会に於いても、このような信仰は根強く存在している。肉親や親しい知人の死に直面すると、我々は彼等が何処かで生き続けていると考え、供養することを怠らない。人類の社会には、少なくとも 4 万年ぐらい前にこのような信仰が発生し、現在に至っても尚存続しているようである。

謝 詞

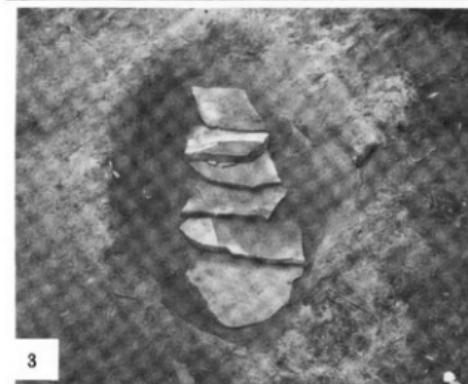
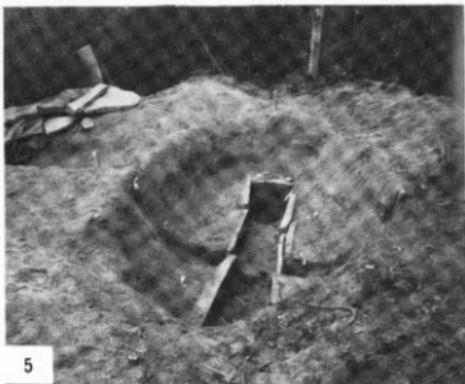
この研究を行なうに当って、X線回折装置、蛍光 X線分析装置の使用を快諾していただいた京都大学工学部教授日下部吉彦博士、同技官木村 誠氏に対し深甚の謝意を表します。

文 献

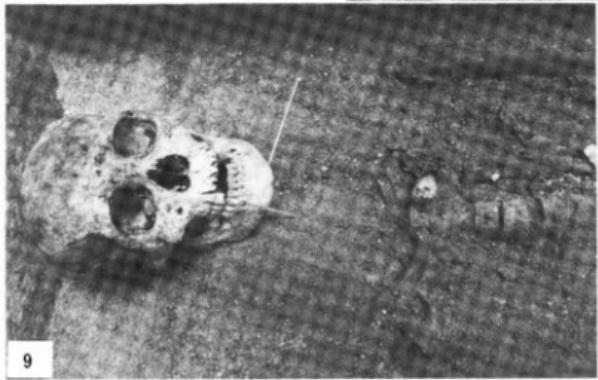
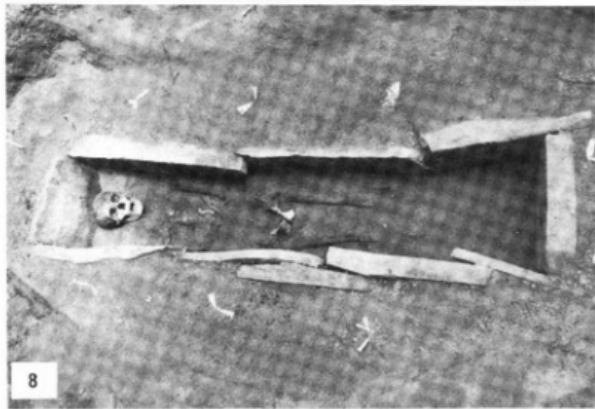
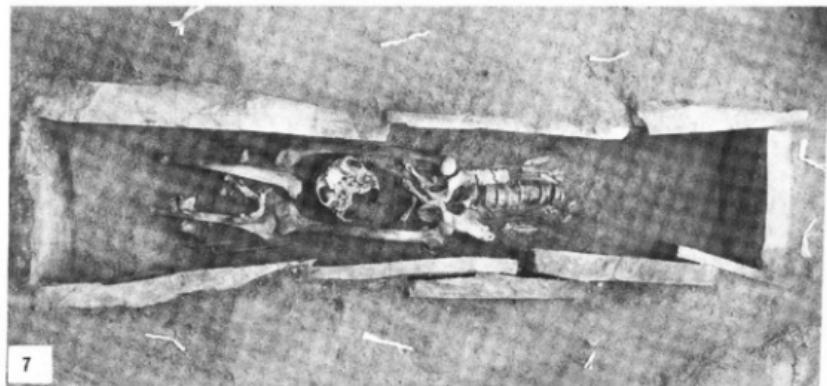
- 1) 安田博幸(1983)：古代の丹・朱と漆喰、森浩一編古代日本の知恵と技術、251-282、大阪書籍
- 2) 矢嶋澄彌・中村忠晴(1974)：出土朱色塗料についての一試み、市原市菊間遺跡、36-43、房総資料刊行会
- 3) 市毛 黑(1984)：朱の考古学、雄山閣
- 4) 前島己基(1985)：森浩一企画日本の古代遺跡20島根、保育社
- 5) 私信
- 6) 私信

- 7) Kuznetsov, V.A., Vasilev, V.I. & Oboleneskii, A.A. (1970) : The sources and conditions of deposit of ore matter in mercury deposits, Z. Pouba & M. Štemprok; Problems of hydrothermal ore deposition, 137 - 140, Schweizerbart' sche Verlagsbuchhandlung (Stuttgart).
- 8) 松田寿男(1975)：古代の木、学生社
- 9) Obermaier, H. (1926) : Grab A Paläolithikum, Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. 4, 449 - 457, Verlag Walter de Gruyter & Co. (Berlin)
- 10) 貢蘭坡(1979)：中国大陆に於ける太古の住民、中国国際書店(北京)
- 11) エヌ・エヌ・デコフ(1969)：カムチャッカ上部旧石器時代、シベリア極東の考古学、1. 極東篇、49 - 69、河出書房新社
- 12) エヌ・エヌ・デコフ(1969)：カムチャッカ遺跡 - ウシュキ 4 号遺跡における旧石器時代の住居址、シベリア極東の考古学、1. 極東篇、39 - 48、河出書房新社
- 13) ベ・ベ・ホロシフ(1957)：イルクーツク市「ロコモチフ」スタジアムに於ける新石器時代の墓、シベリア極東の考古学、3. 東シベリア篇、158 - 170、河出書房新社
- 14) 鄭德坤(松崎寿和訳)(1979)：中國考古学大系、3、旗山閣
- 15) 重松明久(1978)：古墳と古代宗教、学生社
- 16) Scharff, A (1924) : Beigabe in Gräbern, Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. 1, 378 - 382, Verlag Walter de Gruyter & Co. (Berlin).
- 17) Wilke, G. (1926) : Lebender Leichnam, Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. 7, 259 - 261, Verlag Walter de Gruyter & Co. (Berlin).
- Wilke, G. (1927) : Ockerbestattung, Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. 9, 156 - 157, Verlag Walter de Gruyter & Co. (Berlin).
- 18) von Duhn, F. (1927 - 1928) : Rote Farbe im Totenkult, Reallexikon der Vorgeschichte, Bd. 11, 161 - 163, Verlag Walter de Gruyter & Co. (Berlin).
- 他に
- Bray, W. & Trump, D. (1982) : The Penguin Dictionary of Archaeology, 2nd ed., Penguin Books (Middlesex, England)
- Whitehouse, R. D. (1985) : Macmillan Dictionary of Archaeology, Macmillan Press (London)

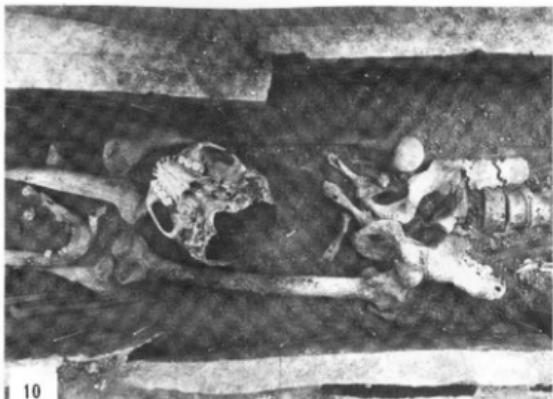
(昭和63年2月6日 京都市左京区松ヶ崎西桜木町30-2)



1:川子谷古墳群遠景 2:墳頂部 3蓋石検出 4:主体部の全容
5:箱式石棺の状況 6:埋戻し後状況

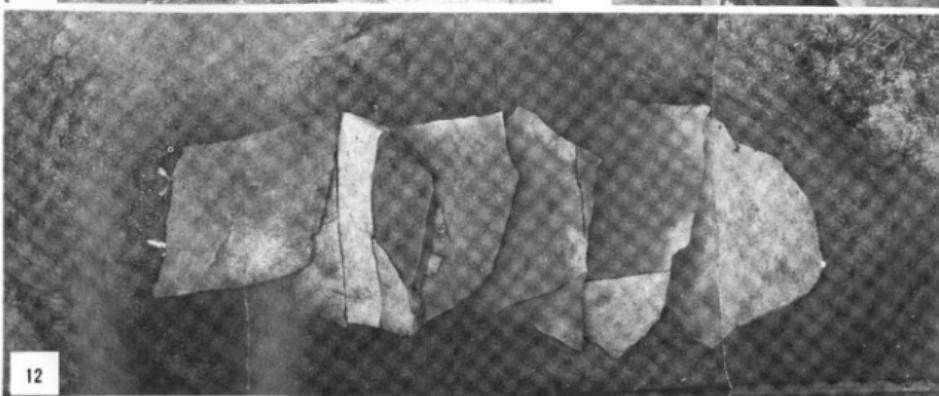


7：重葬状況 8：下位（2号）人埋葬状況 9：復元頭位と床面の朱



10

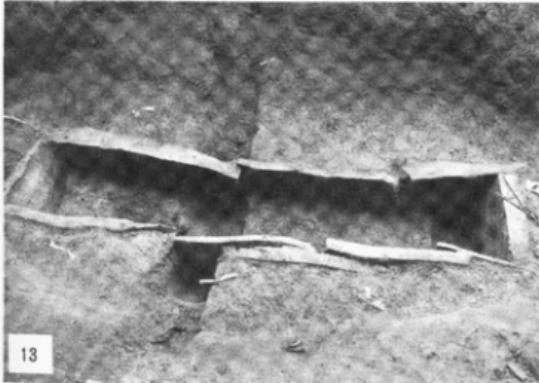
11



12



14



13

10：石棺中央部分(移動された頭骨と重葬状況) 11：人骨取上げ調査
12：蓋石の状況 13：箱式石棺の状況 14：埋戻し作業



土居城跡より神原集落を望む



桜古墓



亀山石積塚



高畦古墳



宿米塚古墳



後ノ辻經塚出土 湖州鏡

神原地区遺跡分布調査報告
(川子谷B1号墳発掘)

昭和63年3月

発行 加茂町教育委員会
島根県大原郡加茂町大字加茂中

印刷 (有)木次印刷
島根県簸石郡三刀屋町三刀屋1635

卷之三

三